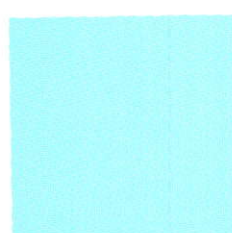
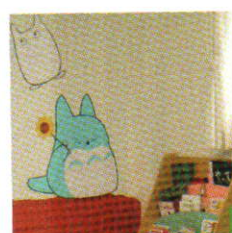
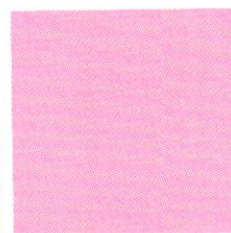
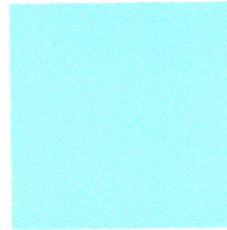
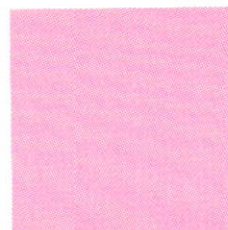


保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2006年度

—第4号—

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所



目 次

I 子育て交流会の現在

子育て交流会の4年目の取り組み— アンケートを通して —

【清 葉子 宋戸洋子】 2

II 保育実践報告

みんなの中で育ち合うクラス作り— A児の育ちを通して —

【川瀬多恵】 23

荒れた子どもたちがみんなでキッズソーランを踊るまで

【河田君代】 28

III 保育子育て研究報告

どの子にも誇りと達成感を体験させたい— 障害のある子の子育てから考える —

【今野正良】 34

IV 海外幼児教育研修報告

「海外における保育実習の成果と課題」

— 海外保育実習 in オーストラリアの取り組みから — 【高須裕美】 40

資料

2006年度保育子育て研究所事業報告 48

2006年度保育子育て研究所会計報告 51

I 子育て交流会の現在

子育て交流会の4年目の取り組み — アンケートを通して —

清 葉子 穴戸洋子

4年目の子育て交流会

年々参加者からの高いニーズに応えるべく、子育て交流会も発展してきました。今年度は、月4回の子育て交流会に加え、参加者のニーズにより細やかに応え、0・1歳児対象の赤ちゃん交流会の実施と子育て支援室開放日をそれぞれ月1回設けていくことにしました。

活動内容としての新しい試みは、年間6回「さくらんぼ通信」を発行し、交流会などの予定と手遊び・絵本の紹介などを行いました。また、ドイツなどのおもちゃで自由にあそぶことができるおもちゃの広場やクリスマスミニコンサート、キャンパス内の畑を利用して芋の苗植えから収穫体験までといった大学教員の専門性をいかした活動も取り入れることができました。その他にも、豊明市消防署の方による乳幼児むけの救命救急講習会を行いました。このように今年度も、幅広い参加者の姿にあった活動の設定と内容の充実に努めていくとともに、参加者の現状に合わせて、保育室の模様替えなど環境整備にもより配慮するよう心掛けていきました。

スタッフとしては、昨年度に引き続き穴戸、清と共に赤ちゃん交流会担当の上村と作ってあそぼう担当の水谷、事務の難波の5人で子育て交流会を展開していきました。また、今年度も新たに子どもの入園を機にボランティアに名乗りをあげた心強いお母さんボランティアも増えてきました。お母さんボランティアのかたも、自分の得意分野をいかして子育て交流会の看板をつくってくれました。現在交流会に参加されている方からもいずれはお手伝いしたいと申し出があり、今後もこのようなかたちでのつながりを大切にしていきたいと考えています。

学生の参加としては、2003年度より短大保育専攻科の学生が授業の一環として参加しています。2005年度からは、大学保育学部3年生がゼミの時間を利用して参加し、2006年度からは、自主的にボランティアで参加する学生もでてきています。専攻科の学生により、保育室の壁面も新しくなり子どもたちからも好評を得ています。キャンパスの中で、子育て支援を行っているということも地域に根付いてきており、保育者養成校の中での学生参加の子育て支援という面からも意義のある活動になりつつあるようです。

参加状況について

今年度は、年間36回の子育て交流会を実施しました。その間、176組の親子の参加があり、のべ931組の親子が参加しました。この他に、今年度より赤ちゃん交流会を9回実施し164組の親子の参加があり、子育て支援室開放日は9回実施し101組の親子の参加がありました。子育て交流会が始まってから今まで4年間のうちにのべ2,368組の親子が参加しました。(表1・図1参照)

また、参加者の年齢構成は図2の通りです。今年度より、赤ちゃん交流会を実施するようになり生後間もない赤ちゃんから、就園前までの幅広い子どもたちの参加がありました。

表1 子育て交流会の開催回数と参加人数

	開催回数	参加人数	学生の参加人数
2003年度	12回	138人	72人
2004年度	31回	741人	134人
2005年度	23回	558人	90人
2006年度	36回	931人	176人

図1 月別参加者数

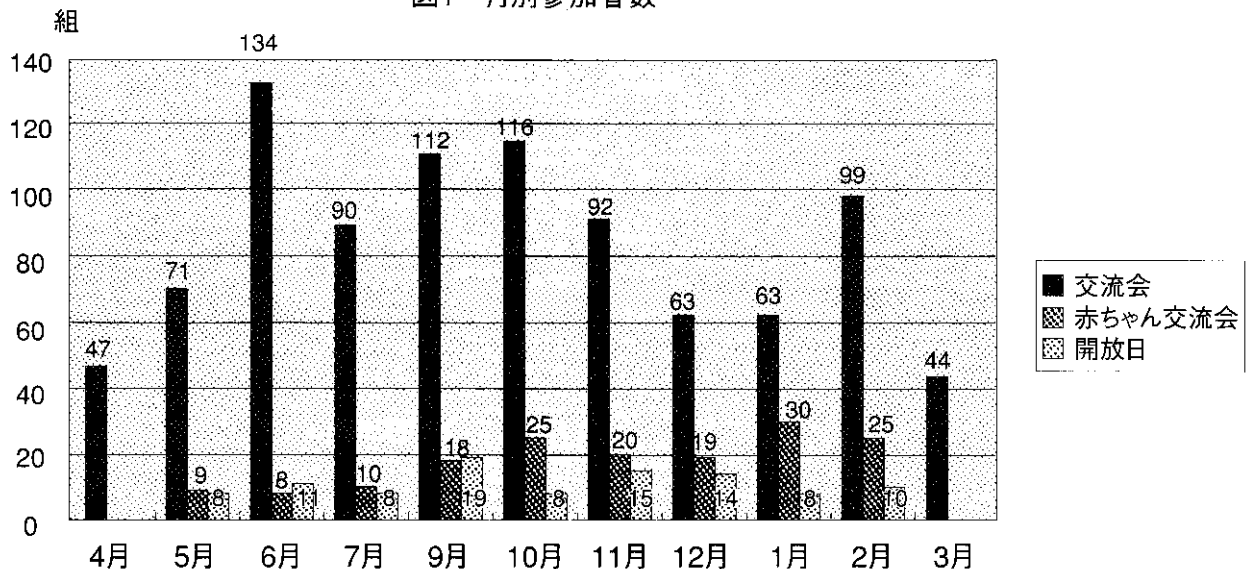
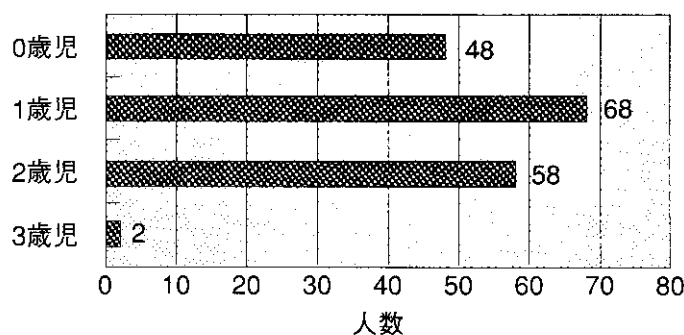


図2 参加者の年齢構成



アンケート調査を通して

今年度も、子育て交流会の総括として参加者・学生・スタッフの方々へのアンケート調査を行いました。

- ・ 研究目的 子育て交流会に参加した母親、学生のアンケートや感想をもとに、保育者養成大学における子育て支援のあり方をさぐる。
- ・ 研究方法 母親向けアンケート：子育て交流会に参加する際に、選択式・自由記述式アンケートを実施し、直接回収。学生用アンケート：ゼミの時間に選択式・自由記述式アンケートを実施し、直接回収。
- ・ 実施時期 2006年11月から12月
- ・ 調査対象者 子育て交流会参加者63名、名古屋短期大学専攻科保育専攻の学生および桜花学園大学保育学部3年生75名、回収率 100%

母親向けアンケート結果

●母親について

本学の子育て交流会は、30代前半の母親が多く参加しています。(図3参照) 子どもは、一人で(図4)第1子が多いという結果が出ました。(図5)

図3 母親の年齢構成

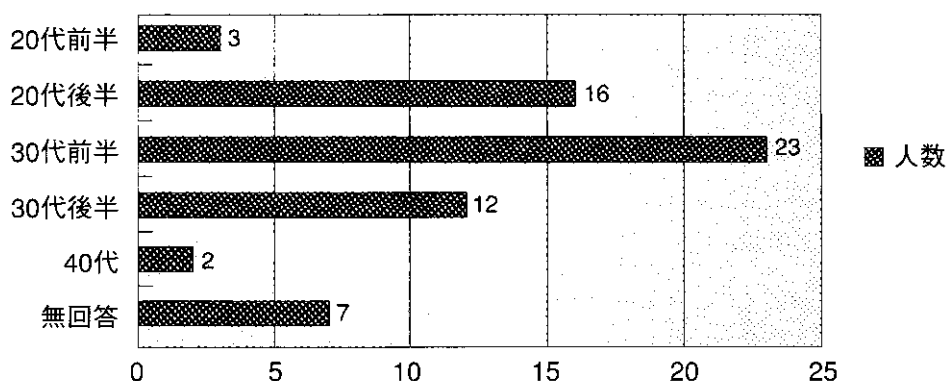


図4 参加者の子どもの数

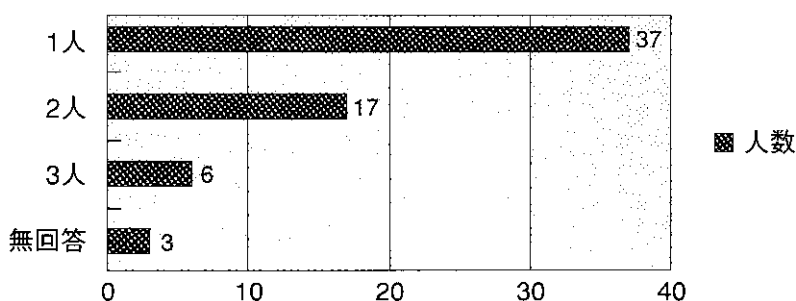
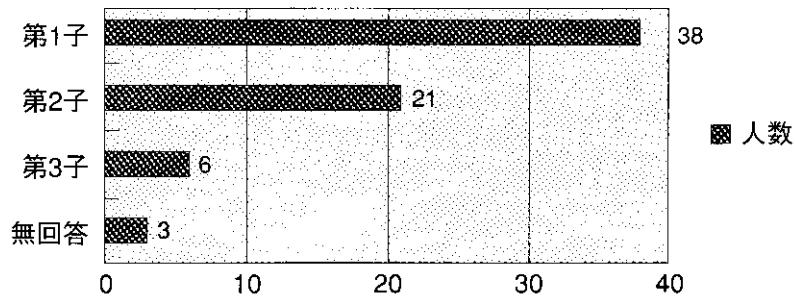


図5 子どもが何子にあたるか



本学までのアクセス

参加者の多くは、名古屋市緑区・豊明市に居住しています。本学までの所要時間は、15分以内という方がほとんどを占めています。(図6)また、参加者の7割のかたは車で来校されています。キャンパス内には駐車場スペースもあるため、それにも対応できています。(図7)

図6 本学までの所要時間

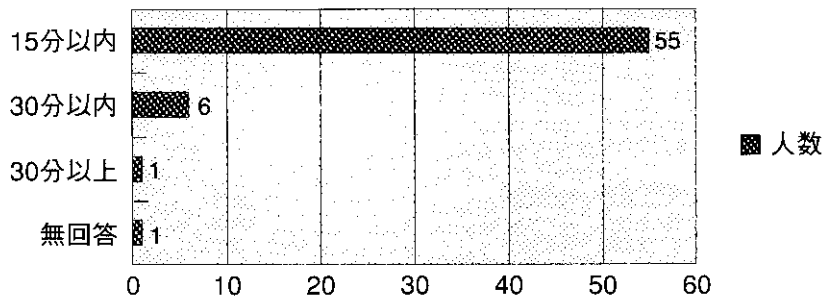
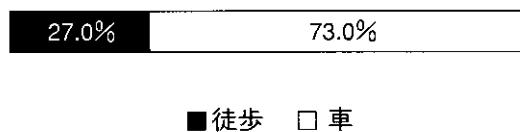


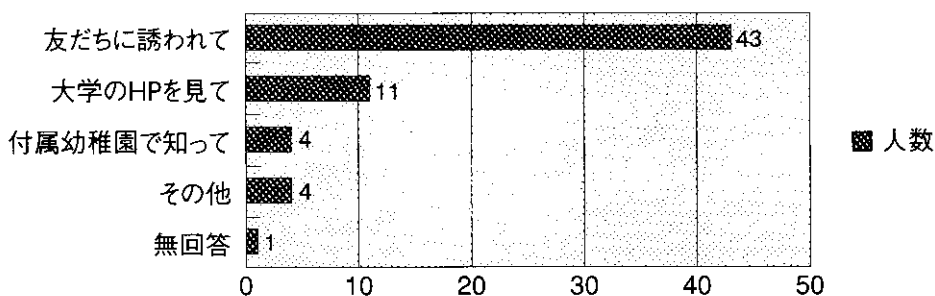
図7 本学までの交通手段



子育て交流会へ参加したきっかけ

今年度は、友だちに誘われて参加された方が多数でした。大学のHPを見て参加される方もおり、今後子育て交流会の情報を充実させてHPでも発信していきたいと思っています。(図8参照)

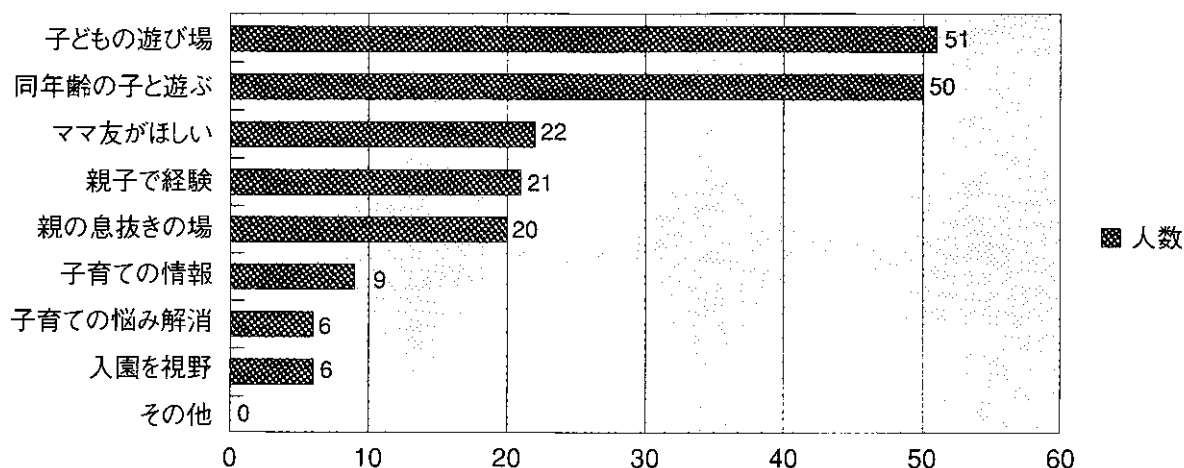
図8 参加のきっかけ



子育て交流会へ参加した目的

子育て交流会への参加の目的は図9の通りです。同年齢の子どもと遊ぶ場を提供することと同時に、母親同士の仲間作りや悩みの解消の場、親の息抜き場として幅広いニーズに応じていく必要があると改めて確認することができました。

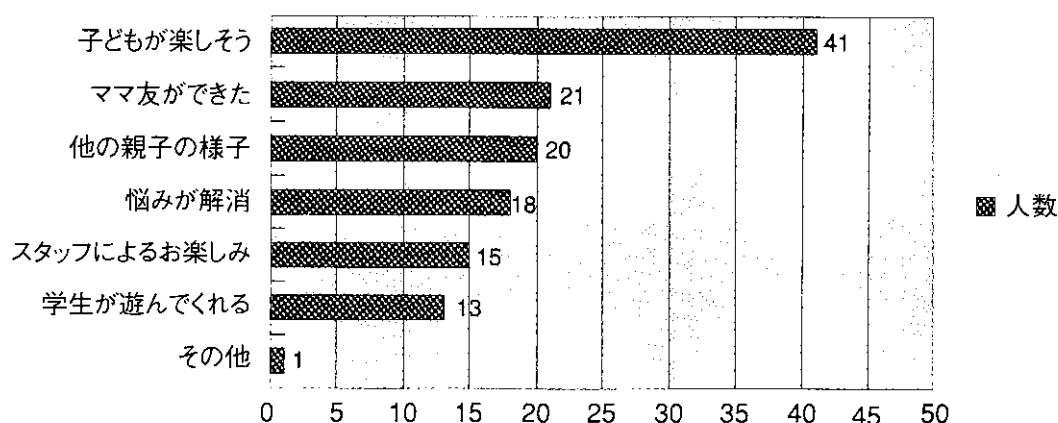
図9 参加の目的



参加してよかったこと

参加者が、子育て交流会へ参加して良かったと感じていることは図10の通りです。ママ友ができたり、他の親子の様子を見ることができて良かったということから、いろいろな親子のかかわりや交流の機会を作ろうという子育て交流会の趣旨がいきているということがうかがわれます。また、学生が遊んでくれるということをあげている方も多く、学生が参加しているということもこの交流会の特色となっています。

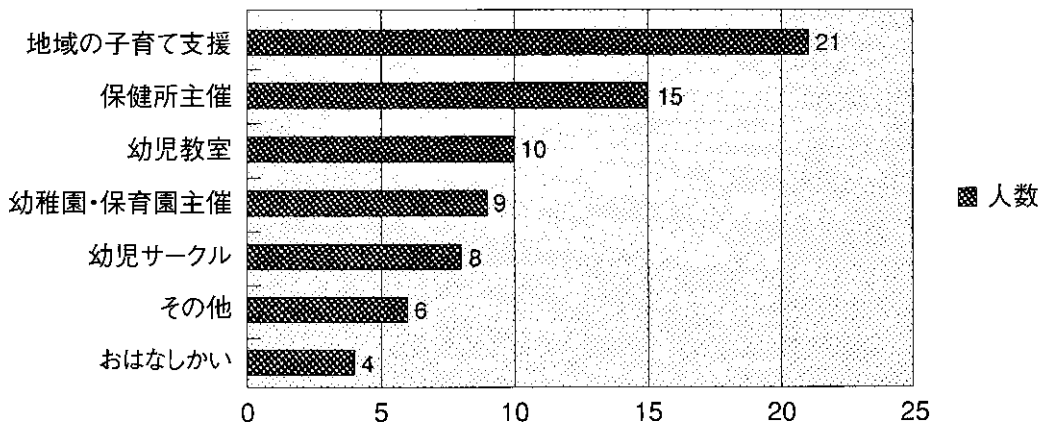
図10 参加してよかったこと



本学の特色

子育て支援が強く求められている今日では、年々子育て支援事業・子育てサークルの活動が活発になり、保健所・児童館・保育園をはじめ、公私にかかわらず毎日どこかで親子の集まりが開かれていると言っても過言ではありません。参加者のほとんどが、本校の子育て交流会以外で行われている子育て支援に関する会などに参加していることがわかりました(図11)。

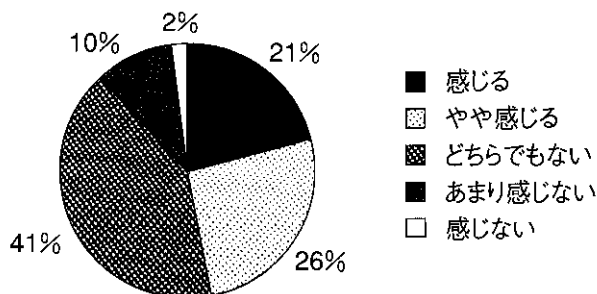
図11 他の子育て支援への参加状況



また、参加者が本校の子育て交流会にどのような特色を感じているかを表したのが図12です。

多くの参加者が、他の子育て支援事業に参加している中、約半数の参加者が本学の子育て交流会に特色があると感じていました。特色として感じている点としては、「大学生が参加しているところが珍しい」「手作りのおもちゃがある」「大学の先生の話が聞ける」「自由に遊ばせてくれ、そばで見守ってくれるところ」などをあげていました。

図12 子育て交流会は他と違う特色を感じるか

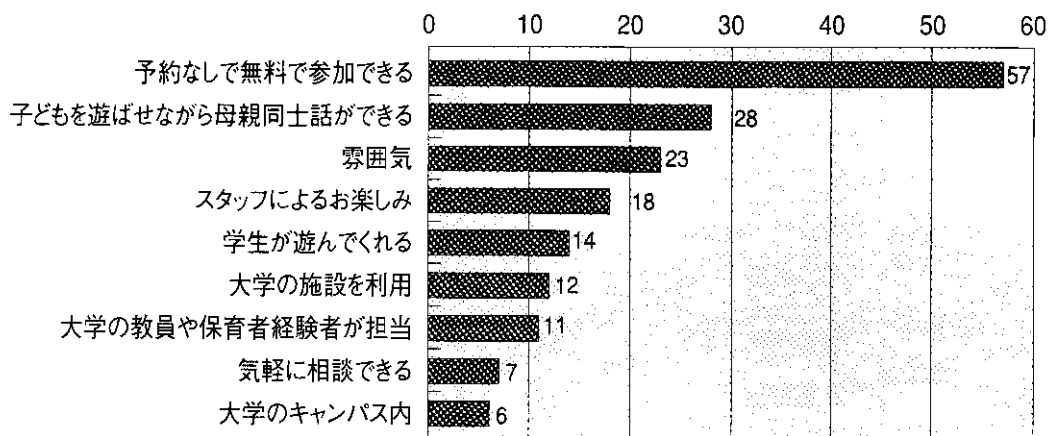


子育て交流会の魅力・好きなところ

子育て交流会を運営していく中で、保育者養成大学の子育て支援室というメリットをどのように特色としていかしていくか課題です。本校では、アットホームな雰囲気大切にしながら「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」をモットーにしています。大学キャンパスや付属幼稚園の施設の有効活用、教具教材の借用や将来保育者を目指す学生の参加などと同時に、教員も一緒に子育て交流会に参加する中で保護者の悩みを自然な形で聞いたり、相談にのっていくことをめざしてきました。今年度は、音楽や美術の教員の専門性をいかした協力も得ることができました。また、大学で行うということで地域の枠を越え、誰でも気軽に、一人でも気兼ねなく参加できる交流会作りを心掛け、大切にしてきました。

参加者は、子育て交流会に参加する中で図13のような魅力を感じていました。(複数回答)

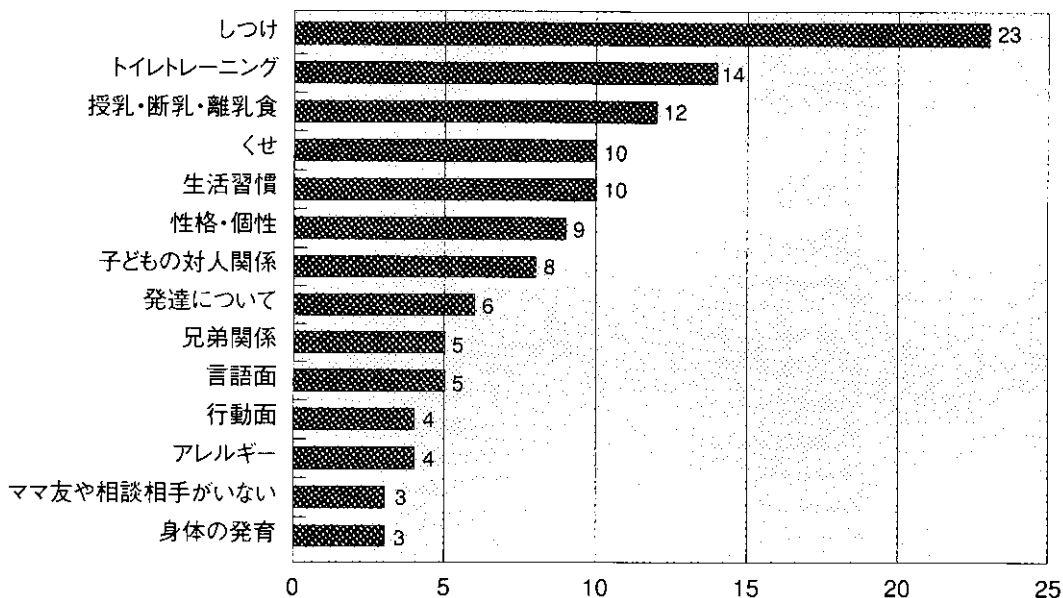
図13 交流会の魅力



参加者のかかえている悩み

図14は、参加者が子育ての悩みとしてあげたものです。しつけやトイレトレーニングなど子育ての際に悩みを抱えています。子育て交流会の目的の中にも、参加者の悩みに答えたり相談に応じるということがあります。参加者からは、スタッフや母親同士の会話の中で子育てのヒントを得たり、悩みが解消されることもあるという参加者もいました。

図14 子育ての悩み



幼稚園のホールでの活動について

「スペースが広く子どももたくさん動き回れてとてもよい。」「リズム体操など、楽しめました。」「マット運動や体操など身体を動かした活動ができて楽しかった。」「幼稚園に慣れることができて良かった。」といった意見があげられ、子育て支援室では、経験できない活動を取り入れて行うことで好評を得ることができました。幼稚園のホールをお借りしての活動は、日頃限られた空間で活動している子育て交流会としては、いつもとは違った活動を企画できるチャンスでもあります。ピアノを使ったり、幼稚園にあるマットや遊具を利用したりと親子で身体を使って遊ぶ大変貴重な機会です。今後も、付属幼稚園と連絡を取りながら定期的に活動を計画していきたいと思っています。

自由記述から

芋掘りや救命救急訓練などの新しい試みが良かったとの意見が多く出されていました。子どもが楽しそうでうれしいと思われているかたも多かったです。

改善点や要望については、主に次のことがあげられていました。「時間を延長してほしい。」「週に2日とか、開放日を増やしてほしい。」といった開催回数や開催時間への延長をのぞむ意見があげられました。また、「少し部屋が狭く、身動きの取れない時もあるので、もう少し広い場所があるといいですね。」「トイレが同じ場所にあるともっと良いですね。」など施設面への要望もありました。

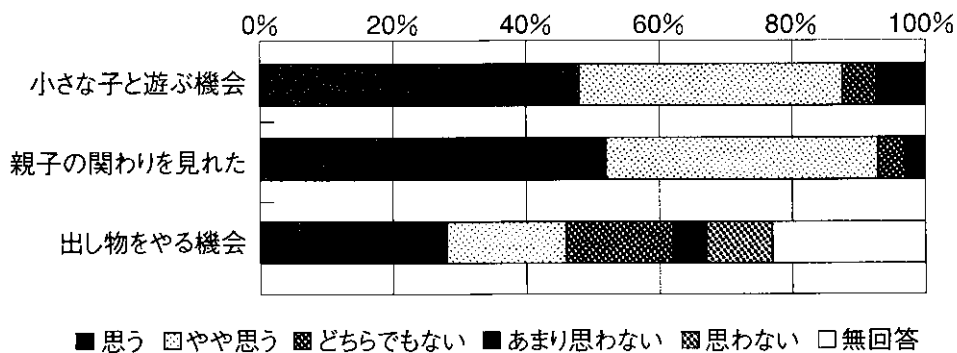
このような意見から、改善できる点は改善しつつ参加者のニーズに沿った子育て交流会をつくっていきたいと思います。

●学生について

学生が子育て交流会を通して経験したこと

学生は、未就園の小さな子どもたちに接する機会が少なく、はじめはどのように接したらいいのか戸惑う様子もありましたが、次第にお母さんとも会話を交わすようになり、笑顔で小さな子どもたちに寄り添っていっしょに遊ぶ姿が見られるようになりました。学生たちは、親子のふれあいを身近に感じる事ができたようでした。(図15)

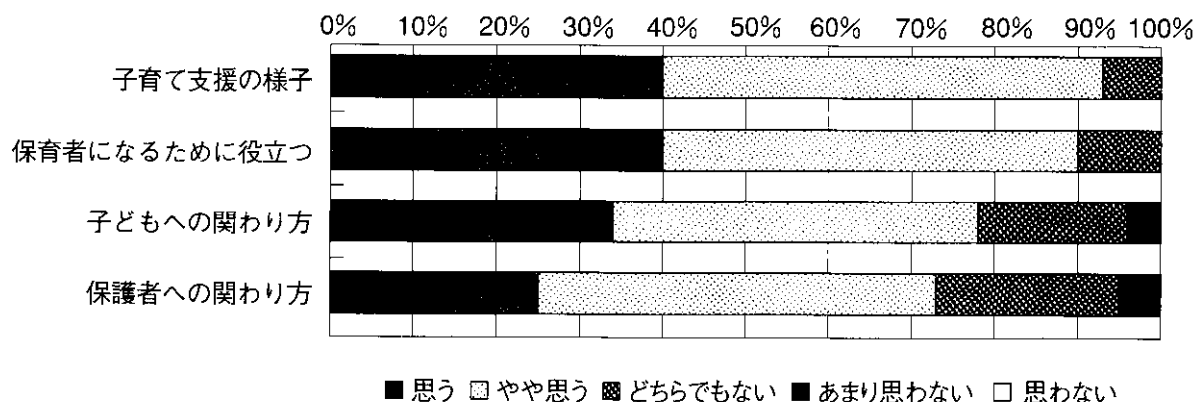
図15 参加して経験できたと思うこと



学生が子育て交流会に参加して得たこと

講義の中で子育て支援について学んでいる学生ですが、実際に自分たちが子育て支援に参加することによってさまざまなことを体感し、生の子育て支援を学びとっていたようです。また、ゼミの時間に企画を考え、ペープサートを演じたり、ボーリングやコマなどのおもちゃを親子で一緒に作るゼミもありました。将来の保育者として、年齢に即した教材づくりを考えるきっかけとなったり、実際に子どもたちの前でやることによって新たな改善点について気付いたようです。(図16)

図16 参加して学んだと思うこと



今後の課題

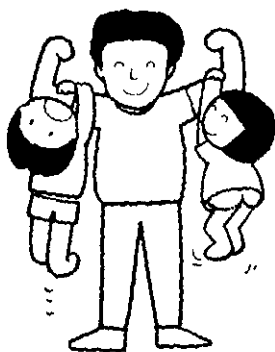
2003年に保育子育て研究所が設立され、その活動の一つとして「子育て交流会」を実施し、開かれた大学として、また、保育者を養成する大学として、地域の子育てセンターの役割が果たせるよう、子育て中の父母への支援活動に取り組んできました。

初年度、月1回だった子育て交流会は、参加者の要望で次年度から月4回になり、さらに今年度は、0・1歳児を対象にした赤ちゃん交流会の実施と、子育て支援室の開放日を月1回設けました。こうした、親のニーズに合わせ、「いつでもだれでも気楽に参加できる 楽しい子育て交流会」をめざしてきました。

4年を経過し、徐々に地域に根つき、当初、10組程度の親子がゆったりくつろいで交流できるようにと、図書館の施設の一部を改修してつくられた子育て支援室も、毎回20組から30組、時には40組以上の親子が参加し、身動きできないような状態の日もできました。それでも雨の日も、風の日も、この交流会を楽しみに親子がやってきます。これだけ要求が強いのです。2005年度から、付属幼稚園のホールを月1度ほど借りることができ、この日は、親子共々のびのびと幼稚園児の姿を見ながらゆったりと交流会を楽しんでいます。他の日は、手狭ななかで実施しています。

名古屋キャンパスには、短大と大学を合わせ、約1000名の保育を学ぶ学生がいます。しかし、学生のほとんどが日頃、乳幼児に接する機会がなく実習でとまどう姿がみられます。また、将来、保育者として保育現場に入った時、子育て支援はどの園も取り組んでいる重要な課題です。大学のキャンパス内で日常的に乳幼児に触れ、子育て支援を学ぶ貴重な機会になります。他の学科の学生も将来、子どもを生み育てる母親になり、こうした親子に触れることは大切な経験になります。

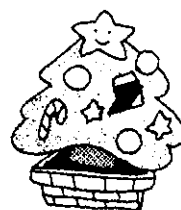
いま、7号館の建設がすすんでいます。開かれた大学として地域の親子がゆったり交流できる、ひろびろとした子育て支援室を用意し、学生と教職員がいつでも気軽に乳幼児と親に声をかけ、一緒に過せる子育て広場(サロン)の建設が強く望まれます。そして、保育子育て研究所の専任のスタッフを配置し、研究所の充実と子育て交流会の発展を願っています。



豊明消防署の方による乳幼児向けの救命救急法講習会



保育学部学生によるクリスマスコンサート





さくらんぼ通信<第1号>

2006年4月

桜花学園大学・名古屋短期大学

保育子育て研究所 子育て交流会発行



親子で楽しいひとときを過ごしましょう！！

タンポポの花が咲き、てんとう虫やちょうちゅうなどかわいい虫たちにも会えるぽかぽか暖かい春がやってきました。子どもといっしょに春を見つけに散歩にでかけるのにもいい季節ですね。

さて、今年度も子育て交流会がスタートしました。今年度は、今までの子育て交流会に加え、赤ちゃんも集える「赤ちゃん交流会（0歳児むけ）」と子育て支援室で自由に遊んでいただく「子育て支援室開放日」を月に1回ずつ企画しました。お母さん同士おしゃべりしたり、親子でいっしょに手遊びをしたり、おもちゃを作ったり、絵本を見たり…お友達の輪を広げ、親子で楽しいひとときを過ごしましょう！！

「さくらんぼ通信」もスタートしました。子育て交流会の予定やお知らせと共に、うたや手遊び、絵本などの紹介もしていきたいと思っています。みなさんからのリクエストもお待ちしております。



ことりを子どもが好きな
どうぶつにしたり、いろいろ
な鳴き声にかえて楽しんで
みて下さい♪

スタッフ紹介

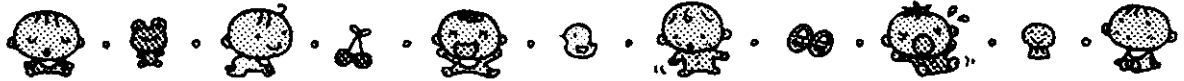


- ★左口 （研究所所長 保育学部教授）
- ★穴戸 （保育科教授）
- ★きよし（保育士）
- ★水谷 （保育士・作ってあそぼう）
- ★上村 （保育士・赤ちゃん交流会）
- ★難波 （事務）
- ★お母さんボランティアの方は、エプロン
をしています。

- 1) ことりは とっても うたがすき
かあさん よぶのも うたでよぶ
びびびび ぴ ちちちち ち
びちくり ぴい
- 2) ことりは とっても うたがすき
とうさん よぶのも うたでよぶ
びびびび ぴ ちちちち ち
びちくり ぴい

与田準一 作詞・芥川也寸志 作曲





付属幼稚園、地域の子育て中のみなさん、こんにちは・・・

保育子育て研究所は、保育者養成を目的とする学科・学部をそなえた名古屋キャンパスにおいて、教員研究者、学生、卒業生をはじめとする現場の保育者、家庭・地域で子育て中の親のみなさん、それぞれをつなぎ支える組織として、2002年10月に発足し、翌年2003年4月から本格的に事業を開始しました。

特に、子育て交流会では、乳幼児期のお子さんを育てているお母さんがたが、付属幼稚園からだけでなく、地域からも多く参加しています。ふとした子育ての中での不安や悩みを軽くし、楽しい子育てができるように少しでも子育て期の交流の輪を広げたい、みなさんの願いは何かを知りこれに応えていくプログラムをつくりたいと、これまでの3年間、年を追うごとにその内容、運営、支え手の充実を図ってきました。先輩お母さんがたもいますよ。いよいよ4年目。どうぞはじめての方も気軽に参加してみてください。 所長・左口



- ★4月 18日 火曜日 子育て交流会
- ★4月 26日 水曜日 子育て交流会
- ★5月 2日 火曜日 子育て交流会
- ★5月 9日 火曜日 赤ちゃん交流会(0歳児むけ)
- ★5月 10日 水曜日 子育て交流会
- ★5月 16日 火曜日 子育て交流会
- ★5月 17日 水曜日 子育て支援室開放日
- ★5月 24日 水曜日 子育て交流会

今年度は、5月より「赤ちゃん交流会（0歳児むけ）」と「子育て支援室開放日」をそれぞれ月1回予定しております。時間：9時30分～11時頃まで。好きな時間にお越しください。自由に遊んでいただき、10時30分頃からお楽しみがあります。

電話 0562-97-1306（内線330）子育て支援室
お問い合わせ等は、火曜日・水曜日の午前中にお願ひします

2006年度 子育て交流会の経過・参加人数・内容

- ※ 4月18日（火） 第1回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 20名 大人 18名 学生 1名
読み聞かせ「パパンがパン」、手遊び、おかあさんと子どもの体操
- ※ 4月26日（水） 第2回 子育て交流会 天気：くもり
子ども 27名 大人 25名 学生 16名
手遊び、絵本「おおきくおおきくおおきくなあれ」おかあさんと子どもの体操
- ※ 5月 2日（火） 第3回 子育て交流会 天気：くもり
子ども 19名 大人 17名
絵本「こいのぼり」
両用紙でかぶと、こいのぼりを作ろう！
- 5月 9日（火） 第1回 赤ちゃん交流会 天気：雨
こども9名 大人 7名 学生 1名
あそびの紹介 わらべうた「ぼうずぼうず」「うまはとしとし」
いないいないばあ、あかちゃんねんね
- ※ 5月10日（水） 第4回 子育て交流会 天気：くもり
子ども 15名 大人 11名 学生 4名
作って遊ぼう「新聞紙を使ってぼうしづくり」 おかあさんと子どもの体操
- ※ 5月16日（火） 第5回 子育て交流会 天気：雨
子ども 23名 大人 21名 学生 6名
絵本「だれかな？だれかな？」
ペープサート「にらめっこ」「いないいないばあ」
- 5月17日（水） 5月 子育て支援室開放日
子ども 8名 大人 7名
自由遊び
- ※ 5月24日（水） 第6回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 14名 大人 13名 学生 1名
大きな絵本「ちいさなきろいかさ」、シールはり「かさに模様をはろう」

- ※ 6月 6日（火） 第7回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 22名 大人 20名 学生 8名（神田ゼミ）
絵本「ほわほわほわわ」
手遊び「とんとんとんとんアンパンマン」
説明の後、畑へ行き、サツマイモの苗を植える
- 6月13日（火） 第2回 赤ちゃん交流会 天気：晴れ
子ども 8名 大人 6名 学生 7名（小島ゼミ）
絵本「もこもこもこ」、赤ちゃんとお母さんの言葉遊び
- ※ 6月14日（水） 第8回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 24名 大人 21名
作って遊ぼう「牛乳パックを使ってカエルを作ろう！」
- ※ 6月20日（火） 第9回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：晴れ
子ども 51名 大人 48名 学生 6名（北島ゼミ）
おもちゃの広場「木のおもちゃで遊ぼう！」手遊び「とんとんとんとんアンパンマン」紙芝居「アンパンマンとはみがきマン」
- 6月21日（水） 6月 子育て支援室開放日
子ども 11名 大人 9名
自由遊び
- ※ 6月28日（水） 第10回 子育て交流会 天気：くもり
子ども 37名 大人 33名
絵本「ノンタン ほわほわほわわ」
外に出てシャボン玉を飛ばそう！
- ※ 7月 4日（火） 第11回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 38名 大人 34名 学生 6名（古畑ゼミ）
七夕飾り製作（すいか・ちょうちん・貝殻・短冊など）うた「たなばたさま」
大学構内で切ってきた笹につけて持ち帰ってもらう。
- 7月 11日（火） 第3回 赤ちゃん交流会 天気：くもり時々雨
子ども 10名 大人 8名
布を使って遊ぼう！
ひざの上で赤ちゃん体操、言葉遊び
- ※ 7月 12日（水） 第12回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：くもり
子ども 32名 大人 30名
園庭で水遊びをしよう！シャボン玉を飛ばそう！
-

- ※ 7月 18日（火） 第13回 子育て交流会 天気：雨
子ども 24名 大人 21名
作って遊ぼう「ロケットを作って遊ぼう！」
- ※ 7月 19日（水） 7月 子育て支援室開放日 天気：雨
子ども 8名 大人 6名 学生 3名
自由遊び
- ※ 9月 5日（火） 第14回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 27名 大人 23名 学生 6名（近藤ゼミ）
ミニシアターを作ろう（円形の紙2枚を使ってお話作り）
- ※ 9月 12日（火） 第4回 赤ちゃん交流会 天気：くもり
子ども 18名 大人 17名
布を使って赤ちゃんと遊ぼう！
体操、言葉遊びなど
- ※ 9月 13日（水） 第15回 子育て交流会 天気：雨
子ども 31名 大人 30名
作って遊ぼう「折り紙を使って、花びらひらひら」
- ※ 9月19日（火） 第16回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：くもり時々雨
子ども 31名 大人 29名
アンパンマン体操、山登り（跳び箱とマットを使って）、トンネルくぐり
- 9月20日（水） 9月 子育て支援室開放日 天気：晴れ
子ども 19名 大人 16名
自由遊び
- ※ 9月27日（水） 第17回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 23名 大人 22名 学生 6名（田中ゼミ）
紙芝居「アンパンマンのピーマンとニンジンさん」
お料理ごっこ「カレーをつくろう！」（歌と手遊び）
- ※ 10月3日（火） 第18回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 35名 大人 33名 学生 7名（藤田ゼミ）
学生によるミニシアター（紙皿を使って）「ころころたまご」
（パンダうさぎコアラ、こぶたぬきつねこ）
大きな紙芝居「おおきくおおきくおおきなあれ」
-

- 10月10日（火） 第5回 赤ちゃん交流会 天気：晴れ
子ども 25名 大人 23名
わらべうた、ひよこちゃんが出たよ！、赤ちゃんとお母さんの体操
- ※ 10月11日（水） 第19回 子育て交流会 天気：雨
子ども 13名 大人 13名 学生 7名（田中ゼミ）
学生によるミニシアター「大きなかぶ」（さつまいもバージョン）
- ※ 10月17日（火） 第20回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 21名 大人 20名 学生 20名（専攻科13名 辻岡ゼミ7名）
絵本「どうぶつえん」手遊び「パンダうさぎコアラ」「大きな栗の木の下で」
子どもと体操「栗を食べよう！」（専攻科学生による）
手遊び「日の窓あけろ」絵本「おおきなおおきなおいも」
- 10月18日（水） 子育て支援室開放日 天気：晴れ
子ども 8名 大人 8名
白巾遊び、ぬり絵
- ※ 10月25日（水） 第21回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：晴れ
子ども 47名 大人 42名 学生 4名（今野ゼミ）
作って遊ぼう「新聞紙と風船でボールを作ろう！」
救命救急講習会（豊明消防署の方を迎えて）
- ※ 11月 7日（火） 第22回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 36名 大人 33名 学生 6名（浅野ゼミ）
いもほり「みんなで植えたお芋を掘ろう！」
- 11月14日（火） 第6回 赤ちゃん交流会 天気：晴れ
子ども 20名 大人 20名
赤ちゃんとお母さんのあそび
- ※ 11月15日（水） 第23回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 16名 大人 13名
作って遊ぼう「ひとだまひこうき」 絵本「ちいさいねこ」
- ※ 11月21日（火） 第24回 子育て交流会（幼稚園ホール） 天気：晴れ
子ども 17名 大人 16名 学生 13名（専攻科）
透きとおる布を使って…リズム体操「カニ・エビ」、いろんな動物になろう！
大きな大きな布の中に入ろう！（専攻科学生）
リトミック指導「あたま、かた、ひざ、ポン」「ひらひら落ち葉」

- 11月 22日 (水) 11月 子育て支援室開放日 天気：晴れ
子ども 15名 大人 13名
自由遊び
- ※ 11月 29日 (水) 第25回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 23名 大人 15名
おもいでグーティーパー、絵本「さつまのおいも」
ペープサート「アンパンマンのおいもほり」
どんぐり拾い (大学構内)
- ※ 12月 5日 (火) 第26回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 19名 大人 18名
作って遊ぼう「サンタさんの首飾り (折り紙を使って)」
- 12月12日 (火) 第7回 赤ちゃん交流会 天気：雨
子ども 19名 大人 19名
赤ちゃんとお母さんのあそび
- ※ 12月13日 (水) 第27回 子育て交流会 (幼稚園ホール) 天気：晴れ
子ども 27名 大人 25名 学生 14名 (大南ゼミ)
学生によるクリスマス音楽会「あわてんぼうのサンタクロース他」
(ハンドベル、トーンチャイム、手・足を使った演奏)
ミニクリスマスツリーを作ろう！
- ※ 12月19日 (火) 第28回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 17名 大人 16名 学生 19名 (専攻科13名 左口ゼミ6名)
絵本「ノンタン サンタクロースだよ」、劇「クリスマス」 (専攻科学生)
パネルシアター「3びきのヤギのガラガラドン」 (左口ゼミ学生)
輪になって自己紹介、絵本紹介「クリスマスのまえのばん」
- 12月20日 (水) 12月 子育て支援室開放日 天気：晴れ
子ども 14名 大人 13名 学生 2名
自由遊び
- ※ 1月 10日 (水) 第29回 子育て交流会 (幼稚園ホール) 天気：晴れ
子ども 12名 大人 11名
作って遊ぼう「新聞紙を使って」
- ※ 1月 16日 (火) 第30回 子育て交流会 天気：晴れ
子ども 17名 大人 15名 学生 13名
パネルシアター「まほうのクレヨン」 (専攻科学生)
-

1月 17日（水）	1月 子育て支援室開放日 天気：雨 子ども 8名 大人 8名 自由遊び
1月 23日（火）	第8回 赤ちゃん交流会 天気：晴れ 子ども 30名 大人 29名 布を使って親子で遊ぼう！ わらべうた
※ 1月 24日（水）	第31回 子育て交流会 天気：くもり 子ども 34名 大人 29名 絵本「ぴょーん」、紙コップと輪ゴムで「ぴょーん」を作ろう！
※ 2月 6日（火）	第32回 子育て交流会 天気：晴れ 子ども 19名 大人 16名 紙芝居「はーい」、絵本「ノントン ボールポン」描画「ふうせんをかこう」
2月 13日（火）	第9回 赤ちゃん交流会 天気：晴れ 子ども 25名 大人 24名 親子あそび「たけんこ（たけのこ）がはえた」「うまはとしとし」 遊具紹介「ダンボール箱であそぶ」
※ 2月 14日（水）	第33回 子育て交流会 天気：雨 子ども 15名 大人 13名 作って遊ぼう「ムクムク」、絵本「どうぶつのおやこ」
※ 2月 20日（火）	第34回 子育て交流会 天気：晴れ 子ども 18名 大人 17名 紙芝居「お母さんといっしょ」、手遊び （穴戸ゼミ学生）
2月 21日（水）	2月 子育て支援室開放日 天気：晴れ 子ども 10名 大人 9名 自由遊び
※ 2月 28日（水）	第35回 子育て交流会 天気：晴れ 子ども 47名 大人 44名 おひなさまを作ろう！（折り紙を使って） 親子でリズム体操（バスでGO！e t c.）
※ 3月 6日（火）	第36回 子育て交流会 天気：晴れ 子ども 44名 大人 42名 丸い紙芝居「はらぺこあおむし」 大きくなったね！「写真を飾ろう！」（紙皿とりボン、シールを使って）

子育て交流会参加学生の感想

- ・ お母さんたちが自分の子どもではない子の面倒を見たり、話しかけたりしていて、本当に皆で育てている感じがした。子どもたちも、少し年齢の違う子と同じ空間にいて、一緒に遊んでいて、すごく良いなあと思った。子どもたちも皆楽しそうだった。
- ・ たくさん遊具があって子どもたちは楽しそうだった。お母さん同士も意見を交流していて、不安や悩みを言い合えていて良いと思った。
- ・ 一緒に遊んでくれる子どももいたけど、お母さんから離れない子どももいて、仲良くなるのは難しいなと思った。このような交流の場は必要だと思うし、もう少しスペースが広いと、子どもがもっと動けていいかなあと思った。
- ・ 子どもとどうやって関わればいいのか分からなかった。もっといっぱい遊びたかった。親との関わりもできて、すごく勉強になった。
- ・ 異年齢の子どもたちが入り混じっていて、それぞれ興味を持つものが違うと教わっていたにもかかわらず、とまどってしまった。でもみんなとてもかわいくて、いるだけで幸せな気分になった。
- ・ おもちゃの取り合いの時の対応が難しかったけれども、勉強になった。
- ・ たくさんのおもちゃがあり、子どもが楽しんで遊べるいい雰囲気だなと思った。次はもっと積極的に子どもとふれ合ったり、子育て支援として交流会はどのような役目を担っているのか、勉強したい。
- ・ 工作では、お母さんが描いたり、子どもが描いたり、自由に作っていて、親子で楽しむということが自然にできていたので、すごいなと思った。お母さん同士の話が大切にされていて、みんなで子育てをしよう、という雰囲気が伝わってきた。
- ・ お母様方といろんな話をするのができ(例えばどのようにして子育て支援室を知ったかなど)、とてもよい機会だった。
- ・ 「子育て支援」という名前だけ聞くと、もっとかしこまった感じかと思ったけど、全然違って、自分がもし子どもを産んだら、ぜひ参加したいと思った。親近感がわく感じでよかった。
- ・ ハイハイやつかまり立ち、つかまり歩きができるようになって、たくさんのことに興味を持ち、活動的な子どもたちを見て、とてもたくさんのことをどんどん吸収しているのだなと思った。首が据わっていない子どもを抱っこしたのは初めてだったので、少し怖かったが、小さな手足に触れて、本当に赤ちゃんってかわいいなと愛しくなった。
- ・ 今日は人形劇をやった。乳児ばかりだったため、集中してくれるか心配だったが、人数が少なかったこともあり、とても真剣に観てくれてよかった。発見の声やうれしそうな声を出して喜んでくれて、やってよかったと思った。
- ・ どのくらいの年齢だと、どんな遊びをするか、言葉を話すか、親との関わり方など、たった1～2時間だったが、たくさんを発見をすることができた。親にとっては、家だけでなく、外で人と接し、情報を得たり、気分転換する時間になるし、子どもにとっても友だちとの関わりや遊びを学ぶ場なのだと実感した。

- ・ (赤ちゃん交流会は)いつもの交流会に比べ、ゆったりとした時間が流れているような感じを受けた。1歳前後の赤ちゃんは様々なおもちゃに興味津津で、目に入ったものにどんどん手を伸ばして遊んでいた。赤ちゃんの1年2年の成長はめまぐるしいものを感じる。やはり子どもはお母さん大好きなんだなと思った。

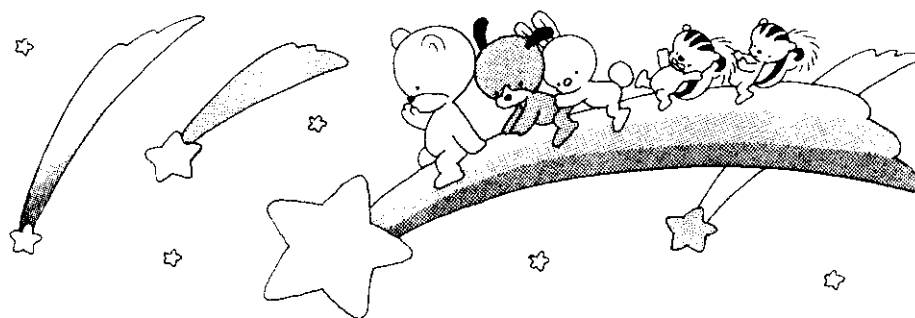
子育て交流会に参加した母親の感想

- ・ 手作りのすごいおもちゃがたくさんあって、子どもも楽しんで遊ばせていただきました。
- ・ 短い時間の参加でしたが、にぎやか、歌などもあり、子どもが楽しめそうな時間がすごせそうなので、また次も参加したいです。
- ・ 人数が多くて驚きました。学生の方が作成した「おもちゃ」が気に入りました。既製品とは違う優しさを感じます。
- ・ いつも楽しく参加しています。手遊びもおもちゃも子どもの喜ぶことがいっぱい。開放日でもきて、うれしいです。幼稚園で遊べる日もたくさんあるといいな。
- ・ 初めは泣いていた娘ですが、興味を引くおもちゃ等がたくさんあり、楽しい雰囲気の中で遊ぶことができ、良かったです。
- ・ 楽しく参加させていただきました。うちの子は人見知りが激しく、初めての場所、初めての人に慣れるのにかなり時間がかかるのですが、今日は初めから1人で遊び出したし、学生のお姉さんとも楽しそうに遊んでいたの、びっくりしました。またぜひ参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。
- ・ こういう場があることはとても良いことだと思いますし、初めて参加し、はじめは泣いていましたが、終わりの頃には私から少し離れていましたので、今後参加して親子共々リフレッシュしていきたいです。
- ・ 2人連れてきましたが、スタッフの方が下の子を抱っこしてくれてくれたおかげで、安心して上の子とゆったり遊ぶことができました。ありがとうございました。次回の芋の苗植え付け、楽しみです。
- ・ 初めての参加でとてもドキドキしていましたが、とても温かい雰囲気、来てみてよかったです。2人目がまだ小さいのですが、2人目も居られる空間があることが嬉しかったです。どうもありがとうございました。

赤ちゃん交流会に参加した母親の感想

- ・ 赤ちゃんだけでゆったりと遊べて、親子でとっても楽しかったです。2人目なので、これからもたまにこうして遊ぶことを大切にしていきたいと思います。
- ・ 遊び方など教えていただけて良かった。手軽にできそうなので、是非やりたいと思った。子どもも、同じ年くらいの子と近くにいるだけでもうれしそうだったので、又来たいです。ありがとうございました。

- ・ たくさんの赤ちゃんとふれあえて良かったです。ふだんあまりこういう場に行くことがないので…。ぜひまた来たいと思います。
- ・ 言葉遊びを教えてもらえたのがとても良かったです。
- ・ おもちゃが豊富で子どもも楽しそうだった。遊び方のアドバイスをしていただき、参考になった。
- ・ 近所に同じ年の子がいないので、参加して良かったです。
- ・ 家にはないおもちゃがたくさんあって、子どもは喜んでいました。まだ他の子と遊ぶことはできませんが、いろんな子とふれあえるいい機会になりました。
- ・ 色々な子どもたちと交流したり、外の世界にも少しずつ慣れていけたらな…と思っていたので、友達に誘われて参加したのですが、とても楽しく、良かったです。次回も時間がありましたら、参加したいと思います。ありがとうございました。
- ・ とても楽しい時間が過ごせました。今後も参加できれば参加したいです。
- ・ おもちゃの種類が多いし、お部屋もきれいで、子どもたちがとても楽しそうなのが印象的でした。またお願いします。
- ・ ちょっと小さすぎるかと思いましたが、同じくらいの子がいて、楽しかったです。



Ⅱ 保育実践報告

みんなの中で育ち合うクラス作り ― A児の育ちを通して ―

半田市立宮池幼稚園 川瀬多恵

はじめに

園生活を送る子どもたちは、自分の思いを相手に伝えてすぐには受け止めてもらえるばかりではなく、待ったり、伝える方法を変えたりと試行錯誤で行っています。仲間の中で、自分の気持ちをコントロールする力をつけていくには保育者はどのような環境や援助を大切にしていけばよいのか、どのようなクラス作りをしていけばよいのかを考え、保育を進めてきました。A児を中心に年長児の一年間の実践を報告させていただきます。

年長児新学期が始まった～A児の姿～

4月、年中児から持ち上がりのクラスで23名という恵まれた人数で年長児の1年が始まりました。23人といえども、一人一人が個性豊かなクラスです。その中、自分の思うように行動してしまい、周りとのトラブルが絶えないA児の姿が目に残りました。A児の新学期の姿は次のようでした。

○A児は、遊びをリードする力があり、友達もA児に魅力を感じ、後を追って遊ぶ姿も見られる。またA児も自分を中心になって遊びを進められることを喜んでいる。

反面、遊びの中で自分の思い通りにならないと相手に手や足を出したり、相手を怖がらせるような言葉を言ったりする。嫌なことがあると遊びからすぐに抜けてしまう。

○生活習慣の面では、神経質と思われるほどきちんと片付けたり、友達がきちんと片付けていないと仕方を友達に教えたりする場面も見られる。

○クラスの中で自分の思ったこと考えたことをよく発言する。なかなか言えない場面があると怒った表情になる。

○年少児の世話をしたが、自分のクラスにあるブロックが気に入り、世話から抜け出す姿も見られた。その場に参加していても世話をしようとする意識は少なかった。

○正義感があり、トラブルの仲裁に入ることもあった。



みんなで遠足ごっこ

A児を含めたクラス作りを考える

クラスの中で、既に力関係が決まっていました。A児に対して誰も意見を言ったりできず、顔色を気にする子が多くいました。

A児は自分の気持ちのコントロールする力の弱さが見られ、周りとの関係をうまく作れない面があります。家庭では、父親から男の子だからと行動に対して厳しく言われていることを、母親より聞きました。家庭で十分自分の気持ちを受け止めてもらえていないことが、園生活で相手の気持ちをうまく受け止められなかったりすることにつながっているように思いました。また、友達と気持ちを合わせて遊ぶ楽しさを味わうことや、遊びの中で問題が起こってもどのように解決していくのかという経験が十分ではないのではないかと丁寧に見ていく必要があると思われました。そこで、次の3点を日々の保育の中で頭に置きながら、大切にしながら、保育に取り組むことにしました。

○A児の気持ちを受け止めながら、友達の気持ちを感じる、知る機会を多くもつようにする。

○友達と協力してつくっていく活動に取り組む中で、仲間と行う楽しさ、充実感をもてるようにする。

○園でのエピソードや成長した面、トラブルの原因などを伝え、母親からも家庭の状況を聞くようにし、信頼関係を図るようにする。



運動会

実践

○自分の気持ちを言葉で表現できるようになった一学期

①正義感からでた行動(6/9)

B児が遊びに入れてもらえなかったことを聞いたA児は、C児を怒りました。C児はA児に「うるさい」と言い、その言葉にカッとしてC児をたたいてしまいました。

A児とC児を中心に話し合う場面をつくり、互いの気持ちを伝え合いました。

A児の正義感からくる行動を認めながらも、手を出してしまったことについて話し合いました。

保育者「C児君、どうして泣いているの？」

C児 「A児君が首のところを押してきたんだ。」

保育者「どうしてA君は押したのかな。」

A児 「だってC児君はB児ちゃんを入れてあげなかったんだもん。」

保育者「A児君はC児君がB児ちゃんのことをかわいそうだと思っていってあげたんだね。」

A児の気持ちを受け止めたものの、話題が首を押したことに移ってしまい、周りで話を聞いていた子もA児を責めるような発言をしたので、A児は怒り出し、その場から立ち去ってしまいました。帰りまでA児の気持ちはおさまらず、さよならも言わず帰ってしまいました。母親には正義感からくる今日の出来事を伝えました。次の日に保育者とC児に対し少し恥ずかしそうに謝ってきました。C児も自分がしたことに対し、A児に謝りました。

教師もトラブルの多さに、ついA児を責めてしまう形に話し合いがなるのですが、A児だけにきちんと向き合い話を聞くような機会をつくることも、大切であると感じました。また、トラブルでは自分の気持ちを整理する時間も必要で、保育者はその場の解決を求めないようにA児と関わることも大切にしていきたいと思いました。

②ブロックをたくさん使って遊びたい!(7/8)

A児を含めた三人でブロックを使って遊んでいたところにD児、E児が入れてほしいと言ってきました。A児はそれを断ったが、何度もD児、E児が言い続けるので、A児はD児を押してしまったのです。D児が泣いてしまい、保育者もそれに気づき話を聞きました。

保育者「どうしたの? D児君」

D児 「A児君がブロックに入れてくれなかったし、押してきたんだよ。」

E児 「A児君はいつもだめって言うんだから。」

A児 「だって俺が作っていたのに壊したことがあるから。」

A児は以前ブロックを壊されたことを思い出し、D児たちに伝えるがD児も負けずと、前のことと今のことは関係ないことを訴えたのでした。A児はみんなで遊ぶと自分のブロックがなくなってしまうという理由を相手に伝えていました。周りの子も自分も使いたいことを必死にA児に伝えていました。

いつもは怒り出しそうな表情をし、すぐに話し合いをやめてしまうA児ですが、相手の顔を見ながら最後まで話を聞いていました。周りの子に気持ちを伝え合う機会を保育者が仲立ちをしながら、丁寧につくっていくことで、少しずつA児の姿に変化が見られるようになっていました。

○自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを受け入れたりしながら運動会に取り組んだ二学期

①運動会の司会の言葉をみんなで考える(10/18)

運動会は年長が中心となり、取り組んでいく行事です。仲間で考え合って作り出していくことの楽しさ、仲間と協力し合う心地よさ、仲間に励まされながら“頑張ってきた”という経験ができるようにと考え、竹馬、リレー、デコレーション作りなどに取り組んでいきます。その一つに運動会の司会があります。一つの競技の名前に自分たちが考えた言葉を加えて言うように提案しました。A児は年中クラスの玉入れの司会をF児、G児と行うことになりました。

F児 「がんばってねって言うのはどうかな。」

A児 「えー。嫌だな。」

G児 「じゃあ、A児君、考えてよ。」

と三人で言葉が決まらない様子でした。教師が他のグループの話し合いに入っていると、A児、F児、G児で「決まったよ。」とうれしそうに報告にきました。

保育者「どんな言葉になったの。」

G児 「橙組さん、黄組さんががんばってね。」

A児 「Fちゃんが考えてくれたよ。」

保育者「A児君もその言葉でよかったんだね。いい言葉を決めることができたね。」

三人で協力して決められた喜びから、一緒に遊ぶ相談をする姿が見られました。小グループでの話し合いでは自分の意見を言ったり、伝えたりがスムーズにできたようです。

②リレーの順番を決めよう(10/23)

リレーで対戦相手のクラスよりどうしたら速く走れるのか話し合いをしました。走り方やバトンの渡し方について話し合ってきたが、今回は走る順番を変えようということになり話し合いが始まりました。

C児 「速く走る子を最後にして、抜かしてもらうことにしたらどうか。」

H児 「誰が速いかわからないから嫌だ。」

C児が自分はみんなの足の速さが分かると言い、「A児君は三番くらいだ」ということを伝えるとA児は「違う。」といい、顔を伏せてしまいました。聞いてみると、A児は自分が最後に走りたかったのです。その気持ちを受けとめ、保育者は、みんなが納得するように最後に走りたい人で一度走ってみることを提案しました。するとA児も納得し、外で走るようになりました。結果はI児が勝ち、最後に走るようになりました。A児は三番目でした。その結果に、その場から立ち去ることなく、他の子と走る順番を決めていました。

二学期に入り、いろいろな活動を通して、A児の姿に大きな変化が見られました。自分の感情を周りにぶつけるだけでなく、相手の気持ちを聞き入れながら活動していくという場面が多く見られるようになってきました。

○みんなと協力して取り組む楽しさを味わう三学期

①劇遊び「エルマーのぼうけん」の話し合い(1/26)

2月中旬に保護者の方に来てもらい、一年間の成長を見てもらう「遊び会」が行われます。その中で劇を見せようと劇遊びに取り組んでいます。劇遊びの道具をどのように作ったらよいのかの話し合いで、A児は積極的にアイデアを出してくれました。好きな役になり、劇ごっこを楽しんだ後、いよいよ遊び会当日の役割を決めるようになりました。それぞれが好きな役を選んだが、ゴリラ役だけは誰もやりたがらず、決まりませんでした。

保育者「ゴリラの役が嫌だって言うし、でもゴリラの出てくるところもやりたいて言うし、困ったね。」

B児 「ゴリラ役が上手そうな人にやってもらったほうがいいよ。」

C児 「A児君とJ児ちゃんが上手そうだよ。」

他の子もA児とJ児にやってほしいことを口々に言うので、二人とも嫌な気持ちになってしまいました。

保育者「やって欲しいのはわかるけれど、みんながやりたくないことをA君やJちゃんだってやりたくないよね。ゴリラの場面なくてもいいよ。」

K児 「嫌だ。ないとおかしい。サルの子ができないよ。」

話し合いは堂々巡りで決まらず、新たな意見も出ず、時間が経っていききました。

突然、A児が「ずっとは嫌だけど、一回だけならやってもいいよ。」と言ってくれたのです。拍手が自然と沸き起こり、「A児君ありがとう。」とみんなから言われ、A児は照れくさそうでした。A児の自分だけの気持ちを優先するのではなく、全体のことを考えて役を引き受けてくれた姿を認め、A児の仲間の中での成長をうれしく思いました。その後A児の演じた姿を見てL児がゴリラ役をやりたいといい、全役が決まりました。L児が休んだ時には、快くA児がゴリラ役を引き受けてくれました。周りの子もA児に対する印象が変わり、「A児君

って優しいんだね。」と認める言葉を表現するようになりました。

年長児の一年間のクラス作りを通して

- ・ 個々の成長が互いの成長につながる

A児を中心に持ち上げて実践をまとめてみたのですが、実は登場してくるB児、C児にも仲間との関係をつくっていくには、課題がありました。B児は自分の気持ちを相手に伝えることが、C児も自分の気持ちをコントロールすることが苦手でした。一人一人が、仲間とのかかわりの中で、自分の気持ちを上手く相手に伝える力を身につけたことが、A児はもちろん、他の子の成長につながってきたのだと思います。

- ・ 仲間と作り上げる活動の楽しさを体験する大切さ

年長児クラスでは、仲間と考え合い、伝え合い、教え合えるチャンスが実に多くあります。年長児の活動を成長できる機会と捉え、保育者が一人一人の発達を確認し、仲間と楽しみながら、認め合えるような活動にしていくことが、育ち合いを大切に作るクラスづくりになっていくのだと思います。

- ・ 家庭と成長を伝え合いながら、喜び合いながら

A児の母親は、口数の少ない方で、子育てのこと、A児の家庭の様子などを最初は話そうとはしませんでした。A児のマイナス面を話すことをできるだけ、最小限にし、遊びの様子や成長したところなどを伝えるようにしてきました。以前からトラブルの多かったA児に対して、母親は、良い面悪い面を冷静に捉えているようでしたが、トラブルの多いA児の姿を知りたくないところもあったようです。担任と話し合う中で、次第にコミュニケーションが取れるようになり、安心して園でのA児の出来事を聞くように変わっていったように思います。母親の安心感が、A児の気持ちの安定、成長につながっていったように思います。



欠席調べ



長縄跳び

荒れた子どもたちがみんなでキッズソーランを踊るまで

愛知・半田市公立保育園
河田君代

園の概要

半田市は、知多半島の中央に位置する人口十万人規模の地方都市です。

東保育園は、市内に十五園ある公立保育園のひとつで、働く父母の要求のもと、昭和五十一年より乳児保育を、翌年には、産休明け保育をはじめました。当時、半田市内では、唯一の0歳からの保育園でした。毎年、定員増が行われ、現在は、二百四十名定員で保育をしています。数年前より、待機児解消の名目で、四月当初から、定員の二割増入所が行われており、毎年、ほぼ定員一杯のなか保育が行われていました。

4歳で出会った子どもたち

この年、他園より転勤してきた私は、かつて出会ったことのない子ども達と出会うことになりました。部屋の中を椅子が飛び、机がひっくり返りました。ロッカーの上であろうと机の上であろうと平気で乗る子ども達でした。部屋の玩具は投げられるためにありました。いつも誰かが、泣いていました。注意すると、「ばばあ、うるせえんだよ」と罵声が返ってきました。机の上に乗って、足でみんなの食事の入っている皿を落としているKをやめさせようと抱きかかえたとき、Kの爪が私の頬に食い込みました。私はこの時、Kを抱きかかえていることしかできませんでした。この世に生まれてから、たった四、五年しかたっていない子ども達が、こうしなければ保育園で過ごすことができない気持ちを考えたら、悲しくて涙が出ました。

力の強い子が、力の弱い子を攻撃のターゲットにしていました。暴力の連鎖が起きていました。保育園は、安心できる場所ではなかったのです。みんなで何かをすることは不可能でした。集団保育をする前にしなければならなかったことがあります。

昨年度の担任と話をする中で、関わりにくさや理解しにくさ等があり、保育をしていく上で、困難さを感じさせる子どもたちをそれぞれのクラスが抱え、大変な一年であったことがわかりました。特に、そういった子どもたちがクラスに占める割合の大きかった一クラスが学級崩壊を起こしていました。にもかかわらず、そのクラスのことは、年齢の問題にはなっていない、園全体の問題にはなっていませんでした。父母とも話をする中で、大変な状況の中で子育てをしていることがわかりました。自分のストレスを子どもにぶつけてしまう人も多く、驚くような場面に出会うこともしばしばでした。でも、どんな親にも我が子のことを思う気持ちがありました。そこに救われました。

保育園を安心できる場所にしよう

集団保育ができない状況の中で、朝九時から昼一時までの四時間パートの保育士と協力して、子どもたちを膝の上に乘せてひとりひとりに絵本を読みました。子ども達の体温が伝わってきました。私の体温も伝わっていったでしょうか。膝の上で絵本を読んでもらっている子ども達はとても穏やかでした。

そして暴力の連鎖を断ち切るために、私が盾になりました。嫌なことは、みんなではっきり「いや!」というようにしました。食事のときくらいは安心して食事ができるようにテーブルを増やし、ゆったり座れるようにしました。また、個人のマークシールを貼って自分の場所が確保されている状態にしました。やっと、落ち着いて食事ができるようになった頃、「ねんちょうさんみたいに、おとうばんやりたい」と子ども達から言ってきました。六月になっていました。

とにかく、パワーのある子ども達でした。でも、そのパワーを上手く使うことが出来ずにいました。友達に対して上手く関われない子も多くいました。友達としっかり向き合って、お互いの体温を感じながら、思いっきり力を出し切れる遊びを考えました。すもうです。強そうに振舞っている子がすぐに押し出されたり、目立たない子が相撲に詳しかったりしました。私を負かすのに、子どもたちは一生懸命になりました。父母参観日に、父母もまきこんでのかっぱゲームでみんなの笑顔がはじけました。

トからす かずのこ にしんのこ
おしりをねらって かっぱのこ

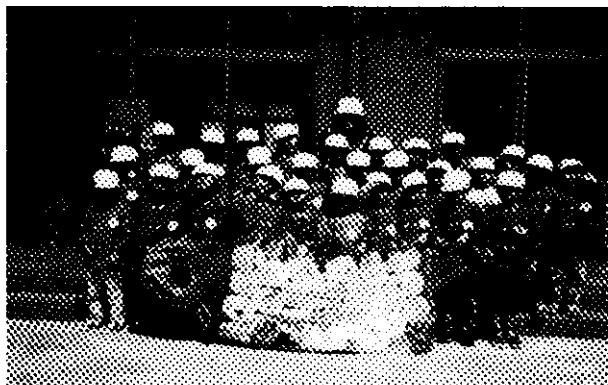
運動会でかっぱ大王から、宝物を取り返したり、生活発表会で「かっぱのこくまのこ」の劇遊びをみんなで作って演じ遊びをしたり、忍者学校に入って修行をしたりしました。大好きな遊びにめぐり合うと、毎日毎日、夢中になって遊ぶ子どもたちでした。子どもたちにとって保育園が楽しい場所になりました。

年長クラスになる

友達や先生と一緒に遊ぶことの楽しさのわかった子どもたちは、年長クラスになりました。クラスメンバーは編成しなおすのでクラスの半分が持ち上がりで、男児十七名、女児十五名、計三十二名(アスペルガー症候群・ADHDの疑いの子2名を含む)を担任することになりました。アスペルガー症候群の子とADHDの子については必要に応じて障害加配の保育士がついてくれることになりました。

前年度の3月には落ち着いていた子ども達ですが、新しいメンバーを迎えてあつという間にまた元に戻ってしまいました。あちこちでトラブル続出ということになりました。それでも、昨年に比べれば、行動の背景には理由があり、理由があることで解決の方法もみんなで考えることが出来ました。4月、5月は子どもたちの好きなことにとことん付き合うことにしました。

ヤモリも初めて飼いました。餌が生餌なので、朝は、ヤモリの餌探しからはじまりました。



5月 こいのぼり
32人のはじめての作品ができあがる

得意なことのある子どもにしよう

このころ、前年度の卒園児が通う小学校との連絡会で、およそ十人くらいの子ども達が学校に行けなくなっていることがわかりました。1年生になることを楽しみに卒園していった子ども達がこんなことになっているとは思ってもいませんでした。保育園のときのことを振り返ると、友達と遊べなかったこと、集団での遊びが成立しにくかったこと、自分に自信が持てていなかったこと、夢中になれることが少なかったことなどがあげられました。

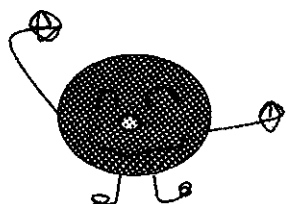
そこで就学を見通して、どんな子どもにしようか話し合いました。話し合ったことは、どの子も小学校でのスタートが気持ちよくきれるように、まずは気の合う友達がいる子にしよう、そして小学校の生活の中で好きなこと、得意なことのある子にしようということになりました。勉強の好きな子、運動の好きな子、友達と遊ぶのが好きな子、当番や係りの仕事が好きな子、それに給食の好きな子だっていい、得意なことのある子はそれだけで学校に行くのが楽しみになるのではと考えました。

また、父母にも保育に関心を持ってもらおう、子ども達にもっと目を向けてもらおう、子どものいいところと一緒に見つけていこうという思いで、クラスだよりをだすことにしました。この頃、子ども達の作る泥だんごが光るようになってきました。泥だんごのようにどの子もピカッと光ってほしいという思いから、クラスだよりに「ぴかっとくん」と名づけました。



6月 泥だんご

♪どのこがよいこ 泥だんご、ついに光る



しろくみクラスだより ぴかっとくん

NO. 1

2002・6・12(水) 東保育園・河田 君代

こども達と一緒に一つ大きくなって(もうこれ以上大きくなりたいのですが…笑)2ヶ月がたちました。私とこども達が互いを知るのに必要な2ヶ月の間にみんなで作ったこいのぼりが保育園の空を元気に泳ぎ、みんなで植えたサツマイモや夏野菜が育ち、部屋はこども達が持ってきてくれる小さい生き物たちでいっぱいです。そしてこども達の作ったおだんごがぴかっと光り出しました。4月、叱られることの多かった子にぴかっと光るところを見つけたらその子の表情が変わりました。とってもいい顔になりました。どのこもぴかっと光るものを持っています。それを見つけるのは大人の役目です。お父さん、お母さんと一緒に子どものぴかっと光るところを見つけこどもたちに自信を持たせたい、そんな願いを込めて白組のクラスだよりは**ぴかっとくん**に決定です。こんなことをお父さんやお母さんに知らせたいと私が思った時に発行しますので楽しみに！

走ることから始めよう

年長になったらやりたいことがどの年にもあります。今年の子どもたちは、跳び箱でした。ところが勢いばかりで、危険この上ないのです。気持ちはあるけれど、体がついていかない、跳び箱を飛ぶのに必要な力がついていないのです。この状態で取り組むには無理がありました。子どもたちの運動能力を見てみると、あきらかに偏りやばらつきがありました。そこで運動に必要な基礎的な力をつけるべく、走ることから始めることにしました。それと同時に東保育園ではなくなっていたリレーと竹馬を年長児に必要な活動として復活させることにしました。思いっきり走れるようになった子ども達がリレーで自分の走りを友達につなぐことは、思いもつなぐことです。バトンを通して伝わってくる友達の思い、応援にこめられたみんなの思いは、走る姿勢を、生きる姿勢を育てるでしょう。竹馬は誰でも乗れる。けれど、乗れるようになるまでには、ドラマがあります。まめができ、痛くてもう、嫌だと思ったとき、友達が教えてくれたり、応援してくれたときのうれしさ、乗れなかった子が乗れるようになったとき、その子の喜びがみんなの喜びになります。リレーの前にタッチかけっこのから、竹馬の前に天狗下駄から始めることにしました。

ところが、走り方がぎこちない、転びやすい、ぐらぐらする天狗下駄に悪戦苦闘する子どもたちの姿に、首をかしげることになりました。運動能力以前の段階でした。つまり、自分の体のイメージが出来ていないのです。自分の体なのに、借り物のようでした。自分の体や腕や脚を認識させ、我が物にするにはどんな活動が望ましいのでしょうか。そんなときに出会ったのがキッズ・ソーランでした。大地にしっかり足をつけ、体の隅々にまで力を届けさせながら、体ひとつで力強い表現ができることが魅力でした。

キッズ・ソーランに取り組もう

やるからには子ども達があこがれるくらいになってやろうと担任二人で猛特訓しました。子ども達にやってみせると、興味を持ってやり始める子ども達の後ろで、遠巻きに見ているだけの子ども達がありました。動きは簡単にしたつもりなのですが、難しさを感じているようです。ある日、大人でも難しい腰をおとすところをやってみせてくれたTを見て、見ているだけだった子ども達がやりはじめました。Tができるなら自分たちにも出来るかもしれない、Tのように踊りたいという思いが伝わってきました。最初のうちは、腕には力が入っても、手はぶらぶらだったり、手は動いても、腕には力が入っていなかったりと、何とも不恰好なソーランでしたが、互いの動きを取り入れていくうちに、手の先、足の先まで力を入れることが出来るようになってきたのです。



9月 大漁旗
グループで自分たちの大漁旗を作る

Ⅲ 保育子育て研究報告

どの子にも誇りと達成感を体験させたい

— 障害のある子の子育てから考える —

今野正良

1. はじめに

筆者は、2006年度の保育学入門講座で障害のあるお子さんとの係わり合いから学んだことをお話ししました。ここでは、その内容の一部を取り出して紹介させていただきたいと思います。

以下に、3つの事柄を取り上げます。1つめは、Nくんという自閉症のお子さんの実際例と学んだことについての紹介です。2つめは、KくんというHの見えないお子さんの保育について親の方や園の先生方、そしてゼミの学生たちと一緒に考えた歩みの経過に関するものです。3つめは、Mくんという0歳児とその親の方との係わりの一場面と学んだことを取り上げたものです。Mくんは、ある疾患のために羞明(しゅうめい)が強く、晴れた日に公園などの戸外に出ることが困難なお子さんです。

最後に、まとめにかえてネゴシエーションという観点から、障害のあるお子さんとの係わり合いについて少し考えてみたいと思います。

2. 共に楽しめる園生活をめざして(その1)

〔実際例〕

H園の年中組に通うNくんの例を、紹介します。彼は、自閉症と診断されています。春から夏にかけて、この園ではNくんが安心して加配の先生と係われるように工夫を重ねていました。園長室は、落ち着かないときにNくんがひと休みに行く場所となりました。そこの引き出しには、バツ(X)のカードが貼ってあります。保育者が怒る必要はありません。自分で引き出しを開けることを控えるようになったからです。クラスの教室には、小さいカーペットで仕切られたNくん用のコーナーがあってそこでは多少落ち着いて過ごしています。時々園庭へ走って出て行くのですが、加配の先生が和やかに係わっています。友だちも、園庭での砂山登りなどの場面でNくんと係わりを持ち始めました。

これまでの園全体での配慮によってできた加配保育士との信頼関係を基盤として、秋になってひとつの対応を行いました。集団での歌遊びの際に、小さい太鼓をNくんに提供したのです。これは本児がとても気に入ったようで、両手でポコポコと嬉しそうにたたくようになりました。クラスのみんなも、「この音、何の音?」「Nくんが太鼓をたたく音!」と応じました。これまでは、集団遊びの時間は教室内を落ち着きなく動き回ったりピョンピョン跳んでいたり、または園庭へ走って行ってしまったりしていました。秋から翌年の春にかけて、太

鼓をたたいて楽しめるようになったNくんは、みんなと楽しく遊べる活動を1つ持つことができるようになりました。親の方もたいへん喜んでおられました。

〔小括〕

Nくんやクラスの友だち、そして他クラスの子どもたちが係わり合いをひろげている本園は、郊外にあって小規模なところですよ。一人ひとりの子どもに対して、園全体で丁寧に取り組んでいるといえると思います。加配保育士に加えて、子育てに関連する学科の学生も嘱託として参加するシステムができています。こうした人員配置により、ある程度丁寧に子どもと係わることができています。まず子どもが安心して加配保育士と信頼関係を築けるようにすることから保育に取り組んでいます。それから友だちとの交流も、一步一步進むように対応するという基本的な流れを園全体で大切にしています。

実際例の中では触れませんでした、写真カードを活用したNくんの意思の汲み取りも本児にはわかりやすい対応となっていました。

また親の方との連携については、自閉症や発達障害のお子さんが3名おられて個別に話し合いの機会を設けたり、親同士が仲良くなる場を提供しようとしていました。「うちの子に対しても、みんなと同じように接してほしい」「個別に接していただいてありがたい」など、親の方の思いは強調点が必ずしも同じではありません。まず、親の方の子育てに関する思いをしっかりと受け止めたいと思います。そのうえで、このお子さんの様子を親の方と一緒に理解を深めて、今どう接していくのがふさわしいかを共に考えていきたいと筆者は思っています。

3. 共に楽しめる園生活をめざして(その2)

〔実際例〕

筆者は、Kくんと1歳前から係わり合いをもってきました。3歳のときに地域のT園に週2日通い始めました。彼は、未熟児網膜症のために目が見えません。4歳になってからは、みんなと同じように毎日通園するようになりました。就園前、親の方は次のような願いを持っていました。すなわち、①幼児期は地域の友だちと触れ合って育ってほしい、②3年保育でじっくり地域の園で過ごさせたい、という願いでした。居住する自治体の障害児保育担当者が、園と行政の間の調整に努力されたこともあって就園の実現にこぎつけることができました。通園1年目は、週に2日だけということもあってなかなか慣れない様子でした。園では、加配保育士をつけていただき丁寧に対応をしておられました。慣れないために、泣いて過ごすこともあったようです。通園2年目になると、親の方と園長先生や加配保育士との交流が格段に進みました。毎日通えるようになったことで、お父さん、お母さんは、たいへん安心されたようでした。Kくんも、泥団子遊びやプールなど、友だちと同じ場所にいて楽しめるようになってきました。目が見えないために、まわりの友だちの様子や園内のいろいろな場所がなかなか把握できませんでした。そのため、加配保育士はとても丁寧な対応を心がけてくださいました。やがて、この保育士と信頼関係が育ち、トイレ・水道・教室・自分の机の場所・カバンをおく棚・玩具を置く棚などの位置関係も少しずつわかってきました。加配保育士のことを、安心させてくれる先生と思うようになったのはとても大事なことでした。遊びたいという気持ちが育ち、給食もよく食べるようになりました。この時期から、帰宅すると園で体験したことや先生のことを嬉しそうに話すことがみられてきたようです。朝も

楽しみに登園するようになってきました。

いよいよ次の段階へと対応を考える時期にきていたと思われました。2年目の夏、筆者も次のステップを考えていた頃に園長先生や保育士の方々と話し合いをする機会がありました。その折りに園長先生の方から、加配の先生がガイドを少し控えてKくんの自発性を待ってみたり、友だちとの係わり合いを演出したりする対応を今の時期に実施するのはよいのではないか、とのお話を伺いました。筆者も、加配の先生とのマンツーマンの活動中心から、場面によっては仲間作りや主体性を見守る対応へと、部分的に方針を転換することに共感しました。

園側の対応の変化として、①外部機関(療育センター、発達相談機関等)との情報交換をより密にしたこと、②Kくんの気持ちが安定して自分でやれそうな場面ではガイドを控えて待ってみること、③友だちと係わり合う機会をつくること、④クラスの人々と共同活動を行う場面を工夫すること、をあげることができます。

園の先生方は、Kくんの様子や情報をよく共有されていました。加配保育士は、Kくんの成長を踏まえて無理なくガイドを控えることを少しずつ実行されたようです。朝の会で、園庭の一隅へ向かう時に加配保育士がガイドを控えると同じクラスの女の子がKくんのそばに来て一緒に移動することがみられてきました。保育士がKくんと間に少し距離を置くことで、友だちがKくんに接する機会が生じ始めたのでした。また、友だちと一緒に遊びやすい活動をあれこれ工夫しました。たとえば、リトミック的な活動(写真1を参照のこと)、鈴をたくさん縫い付けたシートにボールを当てる遊び(写真2を参照のこと)、プールでの活動などです。ガイドに応じることが中心だった彼の活動は、少しずつ主体的活動へと変化していきました。時には玩具を取り合うなど、友だちとの係わり合いも芽生え始めてきました。



写真1(音楽に合わせて「鳥」になる)

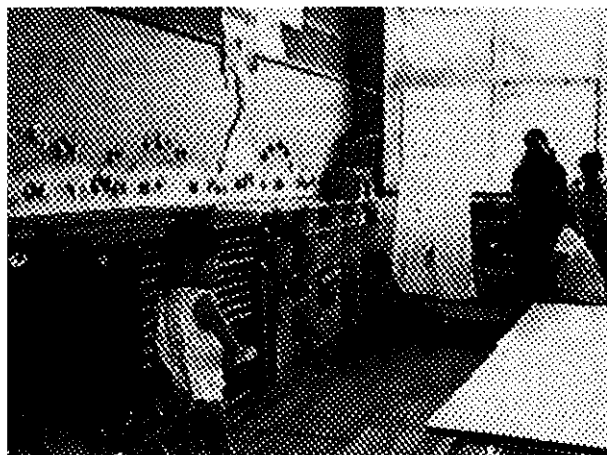


写真2(鈴を付けたシートへのボール投げ)

〔小括〕

目が見えないということは、園内外の位置関係を把握して移動したり、遊びで用いる玩具のしくみや友だちの動きを理解することにある程度時間が必要となります。慣れない間は、必要なアシスタンスを提供しなければなりません。やがて子どもの理解が進んだとき、安定して自分でやれることには保育士はガイドを控えて見守ることも大切な対応であるといえます。

加配保育士との信頼関係を基盤として、やがて友だちとのいわば自然な係わり合いについても、これが起

きやすくなるように徐々に機会を増やしていくことは大切であると思います。Kさんとクラスの仲間たちの場合、鈴のついたシーツヘボールをぶつけて遊ぶ共同活動は、クラスのみんなもとても気に入って一緒に盛り上がって遊ぶことができました。

4. 0歳児のMさんと係わって

〔実際例〕

Mさんは、可愛らしい笑顔をよくみせるお子さんです。7か月頃に筆者は出会いました。ご両親とよくいらっしゃって、プレイルームで係わりました。Mさんはまぶしさを強く感じるお子さんでしたので、日差しの強い日はカーテンを閉めました。室内の照明も調節しました。

生後11か月頃には、筆者にもすっかり慣れました。この時期に伝い歩きを始めました。心地よい笑い声を発しながら、お母さんを基地のようにして活発に遊びます。

この時期のある日のこと、棒に筒を挿しては取ることに熱中していました。筆者は、「ちょうだい」と言って両手を差し出しました。Mさんは、ポカンとしながら手に持っていた筒を再度、棒へ挿しました。この瞬間、筆者が「あらら」と言ってわざとずっこけて見せました。すると、Mさんは筆者を見つめながら動きを数十秒止めて考えこんでいたようでした。やがて、手に持った筒を筆者の方へちょっと差し出してきたのです。筆者は両手を出して「ありがとう」と言って受け取ろうとすると、彼はくると身体を棒の方へ向き直って筒を棒へと挿したのです。そして、筆者を見つめながら大きな笑い声とともにお母さんの背中へつかまりに行きました。筆者は、やはり「あらら」と言ってずっこけました。こうした“くれだまし”ごっこは、次回に会ったときに彼の方からしかけてきてくれたのでした。

〔小括〕

筆者は、Mさんとの係わり合いの中で学んだことが幾つかあります。

1つは、子どもの自己の調整⁽¹⁾⁻⁽⁶⁾を支えたいということです。Mさんの行動の様子から、『ひどく怒ったりがっかりしたりしているのか』『心配や不安でいらいらしているのか』『安心して安定したふるまいをしているのか』『新たな飛躍へと向かっているのか』といった4つの自己調整の水準を仮定することがこちらの対応を決めやすくする、という実感をもったことです。たとえば、Mくん自身が思いもよらなかった筆者のずっこけに対して、彼は動きをぴたりと止めて数十秒考え込んでいました。やがて、一旦この筒を筆者へあげる振りをしてから結局はあげないことで、筆者がずっこけるという事実気づきました。相手がずっこけるということとMくん自身のふるまいとの間に、今まで知らなかった新たな条件関係を発見しているわけですから、『新たな飛躍へと向かう』調整水準と捉えることができるのではないかと考えます。

もう1つは、母子関係に関することです。もちろん、お母さんを基地としてちょっと離れては遊び、遊んではお母さんの元へ戻って行きます。そこでもう少しじっくり両者を見てみると、ほとんど間断なく視線を交わしている事実には驚かされました。お母さんとMくんは、数十秒も間を置かずに、見つめあっては情緒の交流を行っていたのでした。Mくんが手を伸ばした棚の玩具がなかなか取れずにちょっと苦心するとお母さんも真剣な顔つきになります。Mくんの遊びがうまくいくと、彼とお母さんは見つめあって共に自然に微笑むことが間断

なく生じていました。これを筆者は、“感情の響き合い”と呼んでいます。いろんなお子さんと係わらせていただいているのですが、筆者もこのお母さんのような情緒的な双方向性のコミュニケーションを少しでもめざしていきたいと思います。

3つめは、1歳半以降に起こる急なことばの増加現象のことなのですがここでは指摘するに留めます。数個しかことばを発しなかったのが、1歳半以降のある時期に約50個ほどに急にことばが増えるのです。これは、“語彙爆発”と言われるもので、近年研究され始めたようです。ことばの遅れが指摘されるお子さんでは、双方向的な気持ちの読み取り合いや重ね合いの様相がどのようなものであるかを考えることも大切なのではないかと筆者は思っています。

お母さんは、「ひどく気が塞いでいても、朝起きたばかりの我が子が私の顔をじっと見つめてから、やがてニコリしてくれるのです。私であることをわかって、うれしそうにしてくれるのです。うれしくて、うれしくて、生きていく元気が出ます」と言っておられました。大人も子どもに支えられて生きているということを改めて思いました。

5. 初期的なコミュニケーションのあり方⁽⁷⁾

以上みてきましたように、本文では3人のお子さんの実際例を紹介して、彼らとの係わり合いから学んだことを述べました。筆者が係わり合っている障害のあるお子さんの中には、言語活動が初期的な状態に留まっているケースもあります。言語活動が初期的なお子さんと双方向的な情緒的コミュニケーションをはかろうとするときには、以下のようなことを大切に実践を行っています。

(1) ネゴシエーション⁽⁸⁾

近年、西欧で注目される考え方にネゴシエーションの理論というものがあります。これは、言語活動の初期状態にある子ども(たとえば盲ろう幼児等)との係わり合いに際してどのような基本的観点をもって取り組むか、ということを考えるときに参考になると思われます。盲ろうの乳幼児等では、いわゆる教授－学習過程としてその係わり合いを捉えることが必ずしも適切とはいえません。そこで、「その子どもにとって楽しい活動において、相手に伝えたい意図が生じ、しぐさや発声や身振りで伝えようとする創造的な行為が生じる」ように係わり合うというものです。盲ろう乳幼児や言語活動の初期状態にある障害児では、情報が著しく伝わりにくく、「子どもにとってわかりにくい」状況で行動することを強いられているので、ともすると受身的になりやすいと思われれます。自主性や積極性がなかなか伸びないことがあります。楽しく子どもの気持ちの表出を育てる観点が重要であるといえると考えます。

(2) Object Cue

場所や物によるコミュニケーションの方法を大切にしています。特定の場所を特定の活動と結びつけて、その場所へ連れていくことでその活動へと誘う方法です。たとえば部屋の隅にある小さなソファをおむつ交換の場所としたり、台所のテーブルと椅子を食事の場所とするといった考え方です。物の場合は、特定の手さげ袋をさわってもらって買い物に行くことを伝えたり、エプロンを首にかけることで食事を始めることを伝えるなどです。

具体物をコミュニケーションの道具として用いるとき、これらの具体物をObject Cueといいます。

(3) Touch Cue

身体の一部をさわったり、さわって簡単な身振りによって合図をする方法です。軽く手のひらに触れて「始めるよ」という合図をしたり、手を持って少し上に引き上げることで「立って」という意味の合図をするなどです。ある特定の型の身振りをする場合もあります。たとえば、相手の手をとって口へ数回触れさせて「ごはんを食べよう」と誘ったりすることは、これに含まれます。

(4) 意図の表出を育てる

子どもが示すしぐさ、発声、表情などからしたいことを読み取って、これからやろうとすることを一緒に楽しく行うというやり方です。

最後に、出会ったお子さんと双方向的なコミュニケーションをはかることをめざし、それぞれのお子さんが誇りと達成感を体験できるように支援していきたいと考えています。

参考文献

- (1) 深谷澄男 (1998) 心理学と教育実践と自閉的障害 北樹出版 77-110
- (2) 深谷澄男 (2006) 自閉症に働きかける心理学 北樹出版 193-267
- (3) 梅津八三 (1967) 言語行動の系譜 言語 (東京大学公開講座9) 東京大学出版会 49-82
- (4) 梅津八三 (1976) 心理学的行動図 重複障害教育研究所研究紀要 (創刊号) 1-33
- (5) 梅津八三 (1978) 各種障害事例における自覚信号系活動の促進と構成信号系活動の形成に関する研究—とくに盲ろう二重障害事例について— 教育心理学年報17集 101-104
- (6) Hachizo Umezumi (1980) The organization of behavior and sign system activity: The use of psychological assistance for the formation of verbal sign system of the deaf-blind. Proceedings of the First International Congress for the Study of Child Language, 445-475
- (7) 土谷良巳・菅井裕行 (1998) 目と耳の両方が不自由な子どもと係わりあうために 国立特殊教育総合研究所重複障害教育研究部発行 1-54
- (8) 菅井裕行 (2004) 感覚障害を伴う重複障害児教育をめぐる研究動向—視覚聴覚二重障害を中心に— 特殊教育学研究 第41巻 第5号 521-526

IV

海外幼児教育研修報告

「海外における保育実習の成果と課題」

— 海外保育実習in オーストラリアの取り組みから —

高須裕美

1. はじめに

近年、日本の保育園に外国籍の子どもの入園が増加しています。とりわけ愛知県においては、自動車関連産業・陶磁器産業などで働く多くの外国人労働者の子どもが保育園に在籍しています。また、国際化の進む社会で、外国籍の子どもを受け入れ、保育する機会が増加すると言われています。大学では、卒業論文や修了レポートにおいても「海外の保育」をテーマにする学生が増えています。卒業生が、後に外国籍の子どもの保育に戸惑うことも多く、適切な保育を行う上で海外での保育体験は大きな意味をもちます。

名古屋短期大学では、2005年度より主に保育科学生を対象として、“海外保育実習 in Australia”という企画を行っています。オーストラリアの保育園(チャイルド・ケア・センター)における実習(7日間)、また Condominium でのオーストラリア生活を体験しています。この企画では、互いの国の文化の理解、また海外での保育施設で、どのような保育が行われているのかということを見学するだけではなく、実際に学生自身が実習生として部分実習を体験してくるということを主な目的としています。また、保育園職員や送迎の保護者とも触れ合うことで、現地の保育のありかた、保育者の指導法、保育の計画はもとより、子育ての文化・考え方・子どもの食生活などを学びます。この報告では、2005・2006年度の海外保育実習を引率した経験をもとに、企画内容およびオーストラリアの保育の現状を報告するとともに、学生のレポートから明らかになった課題について述べていくことにします。

2. 海外保育実習 in Australiaの概要

【2005年度】(1年目)

期間：2005年7月19日～8月1日

実習は6日間

参加学生：32名(希望者約40名から抽選で選ばれた保育科1年生29名 2年生1名 保育学部3年生2名)

実習園：7園(6園で各4名とクラス数の多い1園で8名が実習)

【2006年度】(2年目)

期間：2006年7月18日～8月2日

実習は7日間

参加学生：32名（全員が保育科1年生※この年は保育科学生を優先的に対象としたため）

実習園：8園（各4名）

2006年度には前年度参加者からの「実習日はもう少し多い方がよい」という意見を参考に、実習日を増やしました。事前に、ガイダンスを6回（1回約90分）実施し、オーストラリアの保育についての事前学習をしています。また、帰国後（1）実習園・クラスの概要 （2）オーストラリアの保育と保育園の生活について （3）私の実習内容について （4）海外保育実習から私が学んだこと、私の課題 （5）オーストラリアでの生活から学んだこと、の項目でレポートを執筆することを課しています。なお、この企画については、私立大学教育研究高度化推進特別補助の対象となっています。

実習園の概要：Australia Queensland州 Gold Coast

実習園は、オーストラリアクイーンズランド州ゴールドコースト近郊にある、ABC ラーニング・センターのチャイルド・ケアセンター（日本の保育園に相当する施設です）8園を利用しています。園は、年齢別クラスに分かれており、各クラスには、常時2人以上の保育士が必ず配置されています。オーストラリアでの保育の資格をここでは「保育士」と呼ぶことにします。なお、オーストラリアにおける保育の資格には「リーダー」と「アシスタント」があり、リーダー1名とアシスタント1名以上が各クラスに配置されています。



保育時間は（月～金）6:30～18:30 登園時間と降園時間は家庭の都合でそれぞれ違います。保育料は週単位で支払われますが、一日に換算すると、50aus\$≒5000円（1aus\$≒100円換算）程度かかります。したがって子ども全員が、毎日来ているというわけではありません。日によってメンバーが違い、全員が揃うということもありません。また、保育時間後の延長保育もありませんでした。この点は、オーストラリアの労働環境から考えて、保護者が遅くまで子どもを預ける必要がないことによると考えられます。



【年齢別クラス】

- ① Baby : 6ヶ月～15ヶ月
- ② Toddler : 15ヶ月～2.5歳
- ③ Junior Kindy : 2歳半～3歳半
- ④ Senior Kindy : 3歳半～4歳半
- ⑤ Pre-School : 4歳半～5歳

上記のような年齢区分でクラス編成が行われています。全員が一斉に進級するのではなく、誕生日で年齢が進むと、該当する年齢次クラスへ移るというシステムになっています。進級は、個人の成長に応じて、誕生日を目安に判断しているようです。

時 間	保育の流れ
9:00	自由遊び
9:30	モーニングティー
10:00	リズム遊び・自由遊び
11:00	ランチ
11:30	昼寝
13:00	起床
13:30	外遊び
15:00	自由遊び
16:00	後園

保育士配置基準

【オーストラリア】

子どもの年齢	保育士：子ども	最大クラス人数
0歳～2歳	1:4	8
0歳～3歳	1:5	10
2歳～3歳	1:6	12
2.5歳～3歳	1:8	16
3歳～6歳	1:12	24

【日本】

子どもの年齢	保育士：子ども
0歳	1:3
1歳～2歳	1:6
3歳	1:20
4歳～5歳	1:30

1日の保育の流れは、自由遊びが中心でした。外遊びはもちろん、部屋の中でも個人で遊ぶことが多く、子ども全員が集まって同じ活動をする時間は、先生のお話や絵本を読んでもらう時や、音楽に合わせて自由に体を動かす、歌う、ダンスをする時のみです。他の時間は、室内か室外で、子どもが自由に遊びを選ぶという過ごし方をしています。

遊びの内容は様々で、複数のテーブルに、Lego、人形、ボード遊び、塗り絵などが配置してあります。大きなパズルやブロック、民族衣装のコーナーなどもあり、各自が好きなもので遊びます。ままごとなども置いてあ



りましたが、保育士が遊びを促すようなこともなくあまり使われていませんでした。

日本とオーストラリアの保育士配置基準を比較すると、0歳児において、日本では1人の保育士が3人の子どもを担当しますが、オーストラリアは1人の保育士が4人を担当します。しかし、その他の年齢区分では、日本の方が担当する子どもの数が多いということです。加えて、オーストラリアの園では、少なくとも1クラスに2名の保育士が随時入っています。



実習生は、8園に各4名配属し、それぞれ違うクラスで実習をしています。2週間のオーストラリア滞在日程のうち6～7日間の実習を行っています。基本的に一人一人が違う年齢児のクラスに入り、一日の保育の流れを体験し、子どもと遊んだり、日本の文化や遊びを紹介したり、簡単な絵本を読ませてもらうこともあります。

学生は英語を専攻している訳ではないので、英語でのコミュニケーションが十分とれるとは限りませんが、園のスタッフは親切に学生がやってみようとする遊び

や絵本にも対応してくれます。例えば、日本語と英語で書かれた紙芝居を持っていき、現地の保育士が一文を英語で読んだ後、学生も続いて日本語で読み、子どもたちが日本語の響きを楽しむこと、あるいは日本の手遊びを日本語で歌うことで異文化への興味を持つことも移民の国らしく保育の中に取り入れています。

3. 学生の実習内容

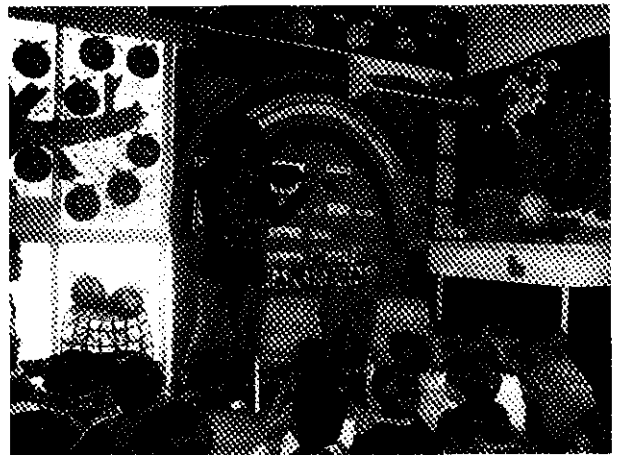
子どもと遊ぶだけでなく、何かを演じたり、教えたりという実習内容を準備して、どういう反応があるのかを確かめてみたいという意欲的な実習生が多く、ある程度出発前に実習内容を準備して参加しています。一部の学生のレポートから、その実習内容や感想などを紹介します。(本人の了解を得ていますので実名で紹介します)

前島佑香：絵本読みをしました。先生が英語の文を読み、後に続いて、日本語で読みました。日本に関心をもつきっかけになってくれるといいなと思いました。



前田香南子：『ねずみくんのチョコッキ』(作：なかえ よしを 絵：上野紀子) を翻訳したものを先生に読んでもらいました。Junior Kindyのクラスで、紙風船を紹介しましたが、楽しそうに遊んでいました。うちわ(表に和紙、反対側に普通紙を貼り付ける。)を子どもと一緒に作りました。普通紙の方に、子どもたちに自由にお絵かきしてもらい、最後は教室に飾りました。一人ひとりの名前を英語・ひらがな・カタカナで書いた名札を作ってプレゼントにしました。

山田梨沙：私は手遊びが好きなので、日本の手遊びを教えてあげたいと思い“キャベツの中から青虫でたよ”を“A Green Caterpillar”として英訳していき、どうにかリズムを合わせようと考えていました。結局、現地に入国して友達が考えてくれて完成しました。園でやったときは、Junior Kindy には少し難しかったのか、あまりよい反応はありませんでした。しかし、私たち学生の中でブームになり、反省会の際に全員で歌えたことはすごく嬉しかったです。



加藤 希実：日本のアンパンマンを描いた自分の名札を作ってつけたところ、子どもに興味を持ってもらえました。子どもがいっぱい触って実習の終る頃にはボロボロになってしまいました。アンパンマンの紙芝居を読んで、さらに大成功しました。また、手遊びで、“What shall we make?”「何つくろう？」をやりました。子どもたちが気に入ってくれて、アンパンマン以外にも “Dinosaur”(恐竜)、“Ghost”(お化け)なども自分たちで作って遊んでいました。また、日本の文化を伝えるために、お好み焼きを作って食べてもらいましたが、オーストラリアの人には口に合わなかったみたいで、不評でした。

野倉香純：Junior Kindyのクラスで、日本から持っていった手作り絵本(SHIRITORI)を読みました。“Ant～



Tooth～House～Elephant～Tiger～Rabbit～Train～Nose
～Egg～Glasses～Sea～Ant”と言うように、イラストがし
りとりになるように作りました。それぞれのイラストを見せ
て、顔や声を変えて、動作や動きをつけることで反応が
ありました。動作や動きで喜ぶのは、日本の子どもと一
緒だと感じました。長新太さんの絵本、「にゅーするする」
を少しアレンジして自分で作りました。読みながら手を
動かしていると真似して“SURUSURU・・・”と言いな
がらみんなで手を下げていました。

4. 学生が感じた日本の保育との違い

学生のレポートから、オーストラリアの施設と日本の園
の比較に関して、よく挙げられていたのが以下のような
点でした。

- ・ いろんな素材で絵を描いていた。造形が多彩(砂ア
ート、パスタ工作、アルミホイルの絵、自然のものを
作ったコラージュ)。教室の壁面に皆の作品をはって
いる。コーナーごとの遊びがあり、おもちゃが多い(工
具品、人種別の人形もある)。
- ・ 教室の窓が多く、明るい。年齢別の園庭がある園もある。
- ・ 建物自体がカラフルでポップな色を使っている。
- ・ 教室に冷蔵庫がある。トイレは、保育室からつながっている明るい環境で、保育者の口が届きやすいよう
になっている。ドアノブが大人の高さにある。
- ・ お父さんの送り迎えが多く、教室内まで入ってきて先生と話をする。
- ・ 保育者は子どもたちに対して、短くはっきりしかる。
- ・ ランチの内容が悪い。(おかしが多く、バランスが悪い、すぐ残してしまう)。
- ・ おもちゃなどのお片付け時間はなく、あまり片付けをしない子が多い。
- ・ 好きなことを好きなだけできるが、すぐどこかへ行ってしまう子がおり、皆で集まるということは少ない。
- ・ 保育者と子どもは別室でランチを食べる。外遊びでも子どもと一緒に遊ばない。日本と比べると子
どもの関わりが少ない。

また、次のような内容も学生のレポートに書かれています。

保育中の食事は、3回あり、内容がおかし中心だったので、小さい頃からこんなものばかり食べていて大丈夫
かと思った。





10時過ぎ Morning Tea (カットフルーツ),
お昼 Lunch (パン、チョコ、クラッカー)
お昼寝後 Afternoon Tea (持ってきたお菓子).

川屋未有希: 私が印象に残っているのは、食事です。ランチがサンドウィッチやホットドック、パスタなどの炭水化物ばかりだから、栄養的にどうなのかと思いました。担当者にその話をしたところ、「オーストラリアの子どもたちは、自分の好きなものを食べて楽しんでるからいいの

だ」と言っておられました。しかし、パンの耳は必ず残したり、自分の食べたい分だけ食べて、あとは好きなように残したりしていたら、食べ物大切さを教えることはできないのではと疑問に思います。

堀田崇代: 日本よりも力を入れているのは異文化交流でした。バリ島の写真集を見せてクイズを出す、日本語でのあいさつや数の数え方ができる。異なる点は、毎日子どもが全員来るわけではなく、登園や降園の時間もばらばらでした。

5. 滞在中の生活

宿泊に利用したのはコンドミニアムで、同じ園のメンバー4名が1室(2ベッドルーム)での自炊生活をします。なお、グループは参加前に友人関係がある者が同じグループにならないように編成しました。滞在中、BBQパーティを近くの河畔で行ったり、各部屋から持ち寄っての夕食パーティを催したり、全員で食事会をすることもありました。しかし、基本的には学生自身で生活することにより、異国での共同生活を体験しながら、現地の食文化にも触れるプログラムになっています。



レポートからは、「新しい友人関係ができた」、「人間関係の難しさや大切さ、温かさ、積極的に人に話しかけることができるようになってきた」、また、「何でもまずやってみることの大切さを学んだ」というものが多くあります。今後も、新たな友人関係を広げる目的で、同様のグループ分けの方法をとることにしています。

実習3日目の夜には、同じ担当年齢の学生同士が、グループに分かれて実習内容の情報交換会をしました。

同じ年齢児へのアプローチに関するアイディアの交換が目的です。絵や擬音など、子どもと共感できる遊びをお互いに考えながら話し合う学生達の姿が見られました。参加学生は1年生で、実践のみならず日本の現場さえも知らないまま海外実習に参加しており、経験がほとんどない状態ですが、個人やグループで考えながら子どもたちと関わるために挑戦しようとしている真剣な姿が見られました。

6. 期待される成果と課題

レポートとアンケートから、この企画の成果と課題についてまとめてみたいと思います。

〔レポートより〕

吉田有希:日本語が通じないオーストラリアでの実習は不安でいっぱいでしたが、子どもたちの笑顔と先生はすぐにわたしを受け入れてくれてとてもfriendlyでした。先生は子どもに自信をもてるように何でもやらせたり、オーバーなくらいに褒めたりしていました。保育には時間にもゆとりがありました。とても落ち着きのある保育だと感じました。ゆとりが子どもたちをのびのびさせ、多くのことを学ばせるのだと考えられることがいっぱいありました。あと、この実習で学んだことは、人の温かさです。言葉は通じないことがたくさんあったけれど、先生方も本当に親切にしてくださったし、子どもたちも私のことを親切にしてくれました。かわいい笑顔は忘れません。

前田可南子:Aussieはフレンドリーで、大らかだった。子どもたちは人懐っこくて、可愛くて、みんな日本につれて帰りたいくらいでした。オーストラリアでも日本でも、同じように子どもたちを見守り、慈しみ、大切に育てています。私はこの貴重な体験を生かして、自分の将来の夢を実現させていきたいと思っています。

〔アンケートより〕

- ・ オーストラリアでの実習という貴重な体験ができて、そして大成功したから参加して本当によかった。言葉も通じないし、経験も少ない私を園の先生や子どもたちは温かく迎えてくれた。また、何にでもチャレンジしてみることの大切さを学んだ。成功と失敗から「学び」があった。
- ・ 日本とオーストラリアを比較して様々な違いを知ることができた。先生に「言葉がたとえ理解できなくても、目を見て笑顔で頑張ってきて」と言われて、「人の目を見て話す、聞く」ということができるようになってきた。日本にいる時は、できなかったことなので嬉しい。
- ・ この実習を通してオーストラリアの風習を知ることでもできたし、素晴らしい自然も見ることができた。きっとこの経験は一生の宝物になると思う。ここで出会うことのできた仲間も一生の友達になるのではないかと思う。食事も全然違うし、準備もたくさんしなければならないけど、是非後輩にも参加して欲しい。
- ・ 32人も参加者がいて、皆と知り合えるようになるか不安だったし無理だと思っていた。でもこうして終えてみると、ほぼ全員と話をし、多くの子と深いつながりができたように思う。大学に戻ってからもこの関係が続くと良いなと思う。
- ・ 自分自身が得たものは3つ
 1. 言葉が通じない中でいかにコミュニケーションするかを考える力
 2. 自分で疑問を考え、それを解決にどのようにつなげるか考える力



3. 貴重な体験、大切な友達

- ・自分で考えて持っていった内容が、海外で通用すると本当に感動を味わえました。失敗も必ず今後の保育者の仕事で役立てます。

異文化圏での保育や子育て文化に触れた体験によって、異文化への理解の深い、国際的視野をもった保育者としての力をつけることができるとともに、日本の保育を客観的にみることができる視点を養うことにつながると期待されます。さらに、言葉でのコミュニケーションが上手く伝わらなくても、自分の思いを伝えられない場面を経験することによって、保育者になった後、外国籍児やその保護者と接する際に立場を理解することができるようになることも期待されます。また、この経験は、どちらの文化や保育が好ましいということではなく、視野や見聞を広げたくて、「自分はどのような保育者になりたいか」という、自分自身の理想とする保育者像を描ききっかけになると期待されます。

海外保育実習終了後に、企画全体の学生へのアンケートを実施しています。実習園での保育、全体の企画、オーストラリアでの友人との自炊生活も含めて、学生の満足度は、昨年、一昨年の参加者に対するアンケートで、5段階評価で全員が「5」と評価しており、参加者の満足度は極めて高くなっています。

このプログラムを経験した学生による自主的な改善提案をもとに、今年度までは、実習園受け入れ園の拡大、実習期間の拡大、加えて、外国語科目「英語」内容を、2006年度より『保育の英会話』に見合った内容に変更しました。それによって「英語」受講者が大幅に増加しており、事前・事後研修をさらに充実させています。また、今後の課題として、本稿で取り上げた報告やアンケートをまとめると、以下の3つのことが挙げられます。一つは、海外での保育体験に加えて、子育て支援、保育行政、子どもの食生活、子育て文化、家庭の生活などを学べるようなプログラムを検討するということ、オーストラリアの保育がどのような考え方で成り立っているかについて調査をし、それを学ぶ機会を設けるということです。もう一つは、さらに教育的に有効な内容、具体的には、学生自身の指導案での部分実習、保育園やその地域での日本文化を紹介する体験などが考えられます。最後に、事前事後指導の内容を今後とも蓄積し「海外保育実習の手引き」を作成すること、このプログラムの充実のために必要ではないかということです。

海外の保育施設において見学形式の保育研修を実施している大学は多いようですが、本学のように実習を中心とした企画を実施している大学は、ほとんどないと思われます。そこで、今後もこの体験的プログラムを積み重ねていくとともに、課題を解決し、他大学でもこのような企画を実施できるような完成されたプログラムを目指すことが、「国際的視野を持った保育者」「学生の描く理想的な保育者像」という期待される成果を追求していく上で意義があるのではないかと思います。



資 料

2006年度保育子育て研究所事業報告

一 高校生中学生向け保育学入門講座

2004年度に土曜講座として開始された保育学入門講座は、2005年度5回講座として継承され、2006年度は下記のような5回講座として引き続き開講された。

参加者が前年度比で大きく減少したが、その大部分は附属高校からの参加が激減したことによる。大学広報部が窓口となって宣伝・募集活動が行われた。前年度と同時期の広報募集活動であったので、原因を特定することはできない。

保育学入門講座は、将来の保育者を夢見る若い世代に保育を学ぶ志を高めてもらおうと、広く開放している講座である。大学として行う大学広報活動の一環であるオープンキャンパスにおける模擬授業とは異なり、実質8,90分程度の本格講座として実施されていることが特徴である。研究所としては今後とも本講座を継続していくことを確認している。

講座番号	日 時	講義題目	講 師	申込者数	参加者数	(親、在学生を含む)
No.1	5月27日	「木をかこう」を体験しよう	浅野卓司	8	6	7
No.2	6月3日	食べることが大好きな子どもを育てるために	小川雄二	23	22	25
No.3	6月10日	どの子にも誇りと達成感を体験させてあげたい ～ハンディキャップのある子の保育から考える～	今野正良	28	30	32
No.4	6月17日	保育の仕事について ～未来を創るよろこび～	白幡久美子	46	40	43
No.5	6月24日	海外の保育・幼児教育事情 ～北欧研修報告～	左口眞朗	17	13	15
計				122	111	122

二 子育て交流会

本年報にも実践報告されている子育て交流会は、附属幼稚園をはじめ地域の子育て期の親子が集う交流会である。年々その開催方法を工夫、配慮して充実したプログラムを提供している。詳細は宍戸・清報告に譲るが、毎週開催、赤ちゃん交流会、だれにも開かれた参加条件、保育を学ぶ在学生たちの参画などいくつかの特徴をもっている。施設や人的な条件整備を図り、保育の総合キャンパスを目指す名古屋キャンパスとして今後とも意義ある企画事業であり続けるはずである。

三 第4回夏季保育研究セミナー

以下のような要領(案内チラシの一部)で開催され、186名の申し込みを得た。

日時 2006年7月23日(日) 10:00～16:20

場所 名古屋キャンパス内(名鉄本線有松または中京競馬場前下車)

主催 名古屋キャンパス保育子育て研究所

日程 9:30から5号館1F受付 10:00開会

午後の分科会は、①から⑤の中から一つ、⑥から⑩の中から一つ選んでください。

参加されない時間帯があっても結構です。

分科会では、各年齢クラスでの保育の悩み・実践を交流し、担当の先生からアドバイスをもらいます。実践屋台村では「ピカピカ泥だんご」「手づくりおもちゃ」「絵画・造形表現活動」など、明日からの保育に役立つ技を学べます。

午前 10:00～11:40	午後 第1限 13:10～	午後 第2限 14:50～
全体会 オープニング 小西 あいさつ 左口 基調報告 近藤正春 「保育・幼児教育をめぐる動向と保育者の役割」 特別授業 松本博雄 「明日の保育にむかってーともに考え元気をだそう」	分科会 ① 0、1歳児 村松 近藤(茂) 古畑 ② 2歳児 木村、川原 ③ 3歳児 牧、森本、藤田 ④ 4、5歳児 宍戸、橋本、北島 ⑤ 実践屋台村 田中、浅野、高田 清、脇、藤原	分科会 ⑥ 0、1歳児 小嶋 辻岡 ⑦ 2歳児 木村、今野 ⑧ 3歳児 牧、鏡 ⑨ 4、5歳児 宍戸、大村、吉田 ⑩ 実践屋台村 田中、浅野、高田、 清、脇、藤原

申し込み方法：

「夏季セミナー申し込み」とし、午後は希望の分科会番号を記して、お名前を明記の上メールを送信してください。

＝以下略＝

本企画事業については、平成18年度全国保育士養成協議会中部ブロック第12回セミナーの分科会で、所長左口による報告が行われた(2006年11月24日)。

四 公開講座

中堅保育者向けセミナーとして開催する企画を立てたが、実施に至らなかった。なお、名古屋キャンパスにおいては、引き続き現任保育士の現職研修が夏季を中心に開催されており、保育系の教員を中心に授業や運営を担当するものも少なくない。今後の企画を考える上で区別と関連を踏まえて追求したい。中堅保育者の研修の機会は今日専門職大学院等も含めて少しずつ広がりを見せている。当研究所としても社会的な要請に応えうる研修の機会を提供していきたい。

五 研究所年報第4号の発行

本年報の発行をもって果たされた。

充実発展を遂げる子育て交流会の実践報告、保育幼児教育の現場実践報告、障害のある子の保育子育て研究からの課題提起、保育科の海外幼児教育研修報告などを内容としている。熟読玩味とともに感想・意見をお寄せいただけたら幸いです。

主なる配布先は、名古屋キャンパス教員、保育科2年生、保育学部2-4年生、秋の教育実習・施設実習先機関・施設、保育系研究教育機関等。

六 研究所の課題に寄せて

現在進めている各企画事業のいっそうの充実とともに、あらたな企画の模索や実験的取り組みが求められている。また、名古屋キャンパスにおけるあらたな施設整備の一環として、保育子育て研究所機能を發揮する物的・人的・財政的基盤をいっそう確立していくことが急務になりつつある。

研究所が二期4年においてその歴史の初期を築いたとすれば、これからの二期4年は真の意味での発展期・充実期にならなければならない。事業数は少ないとはいえ、それぞれに、保育系学生、教員研究者、附属幼稚園およびその内外の子育て期の親子、保育を学ぼうとする中高生、保育幼児教育の現職者や卒業生、保育子育てに関心をもつ市民などを相互につなぐ重要な役割を果たしている。

2007年度から、保育科、保育学部とも定員を増員し、保育学部において、小学校教員養成課程が敷かれ、桜花学園大学大学院人間文化研究科に幼稚園教諭専修免許取得のコースが設けられ、名古屋キャンパスにおいても大学院授業が開始された。また、関連して、豊明市教育委員会との事業連携の具体化が2007年度から図られつつある。このように、保育学・教育学の研究教育のあらたな発展段階を迎えた名古屋キャンパスにおいて、保育子育て研究所機能の高度化、いっそうの充実が求められている。

私たちは、保育総合キャンパスへの展望を抱きつつ、内外の期待に応えて、これからの保育子育て研究所事業のあらたな発展を遂げるべく努力を重ねていきたい。

2006年度保育子育て研究所会計報告

2006年度予算は、230万0665円が認められた。前年度は216万3165円。

執行状況は以下のとおり。

研究所 アルバイト料	消耗品費	夏季保育 研究セミナー関係	保育学入門	年報第4号など 印刷製本費
689,040	19,040	159,665	14,229	517,650

執行額 139万9624円、執行率 60.8%であった。

注1 研究所アルバイト料には、事務アルバイト料と子育て交流会運営担当アルバイト料が含まれる。

注2 夏季保育研究セミナーと保育学入門にはそれぞれにかかわる消耗品費が含まれる。

注3 前年度の卒業生向けチラシは、今年度は在庫分を活用したため、予算執行されていない。

2006年度研究所役員体制 二期2年目

所 長	左口真朗(保育学部)
副所長	田中義和(保育学部)
主任研究員	宍戸洋子(保育科)
主任研究員	高須裕美(保育科)
主任研究員	北島信子(保育学部)
研究所事務	難波佐保(アルバイト)

保育子育て研究所年報第4号 執筆：50音順

川瀬多恵 半田市立宮池幼稚園教諭
河田君代 半田市公立保育園保育士
清 葉子 子育て交流会運営担当 椋山女学園大学教育学部講師
今野正良 桜花学園大学保育学部准教授
穴戸洋子 名古屋短期大学教授（保育科）
高須裕美 名古屋短期大学講師（保育科）

編集責任 保育子育て研究所長

編集後記：

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所は、2002年10月に組織を発足させ、2003年度から正式に予算の裏づけのある事業活動を始めました。すでに2期4年間で終了しました。保育系教員組織を母体に既存の体制を活用する形であらたな社会貢献、連携の性質をもったいくつかの事業を進めてきました。この年報の発行もその重要な柱です。今回現場からの貴重な幼児教育・保育実践報告を2本ご寄稿いただきました。現場の方々の奮闘ぶりがうかがえる心打たれる内容です。今後とも幼児保育の現場とつながりながら、これまで以上に社会的連携を図るとともに保育関係研究者の活動の発展および保育を学ぶ学生たちの成長を実現していきたいものと念願しています。2007年度から保育子育て研究所は第3期の段階を迎えます。関係者のみなさまの大いなるご支援と連携の輪を広げていきたいものです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

保育子育て研究所年報 第4号(2006年度)

発行者	名古屋キャンパス保育子育て研究所
発行年月日	2007年7月10日
住所	〒470-1193 愛知県豊明市栄町武待48 名古屋短期大学内
電話	0562-97-1306
FAX	0562-98-1162
HP	http://www.nagoyacollege.ac.jp/
印刷	(株)シイエム・シイ

桜花学園名古屋キャンパス
保育子育て研究所